

原著論文

朝河貫一によるイエール大学図書館および 米国議会図書館のための日本資料の収集

Collection of Japanese Materials for Yale University Library and the Library of Congress by Kan'ichi Asakawa

松谷有美子

Yumiko MATSUTANI

Résumé

Purpose: The purpose of this study is to examine the process used by Kan'ichi Asakawa (1873-1948) to collect Japanese materials for Yale University Library (YUL) and the Library of Congress (LC), as well as the characteristics and significance of these collections.

Method: First, various documents about Asakawa, including existing studies, letters, and the librarian's annual reports of both libraries, were analyzed. Second, the author examined the actual collections of both libraries, and investigated the style of binding and the written works transcribed under Asakawa's specific supervision. Third, recently published bibliographies of the Japanese collection catalogs of both libraries were analyzed and the characteristics of each collection were compared.

Results: All of the Japanese materials in the USA had been previously donated, but Asakawa's active approach resulted in the first properly organized Japanese collection. A survey of the actual materials indicates, especially from the style of binding, that Asakawa carefully considered the nature and usefulness of each item. At YUL, titles classified under history, legislative system, and law account for 60% of the total, and mostly comprised original documentation on the institutional development of Japan. In the LC, Buddhism accounts for 50% of all titles, reflecting the value Asakawa placed on these materials as being indispensable for understanding the history of Japan. The materials that are found in both YUL and the LC are the original texts of primary resources that must have been considered to contribute to Japanese studies in the USA. The results of the study show that the YUL and LC collections together provide the original texts of primary source materials, which reflect not only Asakawa's collection principles, but also his aspirations for both libraries to build historically valuable collections.

松谷有美子：清泉女子大学附属図書館

Yumiko MATSUTANI: Seisen University Library

e-mail: matsutani@2013.jukuin.keio.ac.jp

受付日：2014年3月30日 改訂稿受付日：2014年7月8日 受理日：2014年9月1日

- I. 背景と目的
 - A. 朝河貫一と第1回日本帰国
 - B. アメリカの日本コレクション草創期にあたる朝河の収集
 - C. 問題の所在
- II. 朝河貫一と2つの日本コレクション
 - A. 朝河貫一の生涯における日本資料収集の位置
 - B. イェール大学図書館と米国議会図書館の日本資料の歴史
- III. 日本資料収集に至る道程
 - A. 収集活動を明らかにするために用いた資料
 - B. 収集の経緯
 - C. 収集の過程
- IV. 実現したコレクション
 - A. コレクションの特徴を明らかにするために用いた資料
 - B. イェール大学図書館のコレクションの特徴
 - C. 米国議会図書館のコレクションの特徴
 - D. イェール大学図書館と米国議会図書館のコレクションの重複資料の比較
 - E. 目録の限界と今後の課題
- V. 朝河貫一の目指したコレクションとその意義

I. 背景と目的

A. 朝河貫一と第1回日本帰国

朝河貫一(1873-1948)は、アメリカの大学(イエール大学)で日本人として初めて正教授になった人物である。1895年に留学してから亡くなるまで、50年以上歴史学者としてアメリカで研究生活を送るが、その間に2度、いずれも10年ごとに短い期間で日本に帰国している。第1回帰国は、イエール大学での研究生活に入る直前の1906年2月から1907年8月にかけて、第2回帰国は、1917年7月から1919年9月である。この第1回帰国の約1年半の日本滞在中に、朝河は、自ら提案してイエール大学図書館(Yale University Library: YUL)と米国議会図書館(Library of Congress: LC)のために日本資料の収集を行った。これは、両図書館にとって初めての計画的な日本資料の収集であったと言われている^{1),2)}。本研究は、アメリカにおける日本コレクションがどのようにして始まったのかを朝河の第1回日本帰国における日本資料の収集に焦点をあて、考察するのである。

第1回帰国前後の朝河は、次のような生活を送っていた。1902年9月からダートマス大学の講師をしていた朝河は、日露戦争勃発後の1904年11月に、*The Russo-Japanese Conflict*(日露衝突)を出版し、日本の事情を英米人に説き、各地で講演を行った。1905年8月のポーツマス講和会議では、日本側オブザーバーとして賠償放棄論を説くなど奔走していた。1905年10月には、イエール大学時代に知り合ったMiriam J. Cameron Dingwallと結婚して、人生の転機を迎えていた。元来、欧米に対して東洋を解釈しようという目的をもって勉学に励んできた朝河は、アメリカでその目的と事業を継続する意志を固めていた。1905年12月には、朝河にイエール大学への奉職を打診する内意が伝えられていたとされ、日本への一時帰国を経て、1907年9月にイエール大学の講師となった²⁾。つまり、第1回日本帰国は、朝河にとって研究者としての駆け出しの時期にあたる。日本資料の収集は、朝河がアメリカで本格的に研究者として歩み始める直前に行われたことになる。

朝河の代表的な伝記を書いた阿部善雄による

と、朝河が一時的に日本に帰国することを考え始めたのは、1905年6月、7月頃からということである²⁾。収集の詳細は後述するが、朝河の帰国は収集が決定するよりも前に計画されていた。しかし、収集は帰国の大きな目的となった。日本資料収集以外の帰国の目的は、いくつか挙げられる。まず、1906年は渡米から10年経った節目の年でもあり、父親との再会、恩師や友人への挨拶などがあった。次に、イエール大学の講師職に関わる下準備調査のためである³⁾。朝河は自身の研究のため、当時『大日本史料』、『大日本古文書』の刊行を開始していた帝国大学文科大学史料編纂掛(現在の東京大学史料編纂所)で全国から収集された日本史の基本史料を調査し、研究を通じて歴史学者らと親交を深めた⁴⁾。さらに、日露戦争後の日本の姿を直視することも朝河が自らに課した仕事の1つであった⁵⁾。日本の気運を目の当たりにした朝河は、第1回帰国後まもなくの1909年に、唯一の日本語の著作『日本の禍機』を著して日本の行く末を案じ、警告している⁴⁾。

B. アメリカの日本コレクション草創期にあたる朝河の収集

本研究のテーマである朝河貫一の日本資料収集の時期は、アメリカにおける主だった日本コレクション⁶⁾あるいは、日本図書館⁷⁾の草創期(1900-1920年代)にあたる。日本は日清戦争(1894-1895)、日露戦争(1904-1905)、韓国併合(1910)などを契機に、国際関係に影響を及ぼす近代国家の1つとして諸外国から見られるようになった。短期間で近代化に成功したことが肯定的にとらえられる一方で、次第に経済、軍事面で警戒され、牽制されるようになっていく⁸⁾。アメリカは米西戦争(1898)におけるフィリピン群島領有やハワイ併合(1898)、中国への門戸開放通牒(1899)など、一連の拡張政策を通じて太平洋の覇権獲得に乗り出した時期である⁹⁾。

イエール大学は、1887年にYale CollegeからYale Universityになったが、図書館は1865年にはアメリカの学術図書館としてすでに2番目に大きく、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、

主要な研究図書館に変化していたとされる¹⁰⁾。Andrew Y. Kurodaは、福田なをみの調査¹¹⁾をもとに1910年のイエール大学ほど早く日本コレクションを始めたアメリカの大学はなかったと言及している¹²⁾。和田敦彦は、戦前からまとまった日本コレクションを構築していたのはLC、イエール大学、コロンビア大学、ハワイ大学、ノースウェスタン大学としており、ほとんどが現在も大規模なコレクションを形成している¹³⁾。

20世紀初頭のアメリカにおいて、まとまった日本コレクションを作るという発想を持ち、実行できたのは日本人であった。和田によれば、日本語を自由に操り、日本の学術に詳しく、日本国内にアカデミックなネットワークを持った人物が同時にアメリカの大学教員、または司書を兼ねるとするのが理想的な形で、戦前にこうした恵まれた状況を作ること成功したのが朝河を迎えたイエール大学であった¹³⁾。

C. 問題の所在

朝河の日本資料収集について紹介している文献は、阿部による朝河の伝記²⁾、金子英生やEllen H. Hammondによるイエール大学図書館史の文献¹⁴⁾、Kurodaによる米国議会図書館史の文献¹²⁾、小泉徹による図書館員としての朝河を取り上げた文献¹⁵⁾、小峯和明ら両図書館の日本資料の目録編纂を中心とした文献¹⁶⁾⁻¹⁹⁾、和田による北米の日本語蔵書史の調査¹³⁾がある。

先行研究の多くは阿部の伝記を引用元としている、もしくは阿部の伝記に拠っていると推察される。しかし、阿部は伝記の文中で、コレクションの概要について両図書館長年次報告の内容にほぼ忠実に記していること、両図書館長年次報告に記述のない具体的な書名について記していないことから、阿部が実際のコレクションの現物に当たっているとは考えにくい。さらに、阿部の伝記には引用文献がなく、学術資料として限界がある。これらの文献では、収集や蔵書の傾向に関して、朝河が日本古典籍を中心に選定し、購入したとみられること、一次資料を中心に収集したこと、従来その存在さえ知られていなかった資料や『国書総

目録』に記載のない資料が数多く含まれること、収集自体を自己目的化するような傾向はみられないこと、YULに仏教資料がなくLCに多くの仏教資料があることから両図書館の収集資料の大体のジャンル分けがなされていたらしいこと、収集資料を洋装にしているという特徴があることが明らかにされている^{1), 16)-19)}。しかし、目録編纂に携わった小峯らは、目録作成の作業過程で得た感触を述べるに止まり、朝河の見識に対する根拠は示されてこなかった。和田の著作からは、アメリカにおける日本図書館が朝河とともに始まったことが読み取れるにもかかわらず、口火を切った朝河の収集に関して十分な記述が見当たらない。朝河がどのようなコレクションを作ろうとしたのか、どのような資料がどれだけ収集されたのか、実現したコレクションに朝河の意図がどう反映されているのかは明らかになっていない。

本研究は、朝河の1906年2月から1907年8月にかけての第1回日本帰国の際の日本資料収集の背景や結果として①収集の経緯と過程、②コレクションの特徴を明らかにし、③朝河の目指したコレクションの意義を考察することを目的とする。

なお、本研究で扱う「日本資料」とは、日本語で書かれた資料および漢籍を指す。外国語で日本について記述、または研究した資料（洋書）は含めない。

以下、第II章において、朝河の経歴と日本資料収集の位置関係について、また、YULとLCそれぞれの日本資料収集の歴史について概観する。第III章では、日本資料収集の経緯と過程を書簡、図書館長年次報告、現物をもとに読み解く。第IV章で、近年の目録を用いてコレクションの特徴を比較検討し、コレクションの意義を考察する。第V章において、前章までの検討を踏まえ、まとめを行う。

II. 朝河貫一と2つの日本コレクション

A. 朝河貫一の生涯における日本資料収集の位置

1. 朝河貫一の経歴

朝河貫一は、1873年12月20日（戸籍上は22日）に福島県安達郡二本松町で生まれた（付録の

年譜を参照）。旧二本松藩士で教員となった父のもとで神道、儒教、仏教を身近に触れながら育った。山内晴子は、朝河が幼少期に仏教に触れ、漢文や日本史、民主主義の素養を身につけ、異なる宗教の共存について教えを受けていたとしている²⁰⁾。

福島県尋常中学校時代には、商業家を目指し、英語を修得していた。1892年3月に尋常中学校を卒業した朝河は、1892年12月に東京専門学校（後の早稲田大学）文学部文学科に入学した。開校10年目を迎えていた同専門学校は、1890年に坪内逍遙によって設置された文学科があり、朝河はその第3回生となった。朝河は、「宗教的生命を論じて究竟の疑に及ぶ」という哲学に関する卒業論文を書いている。背景には、仏教とキリスト教どちらが国教となるか、倫理学が宗教の代わりとなるかが論じられていた当時の状況があったとみられる。1895年7月30日に東京専門学校を首席で卒業した朝河は、同年12月にアメリカへ渡り、翌年1月にニューハンプシャー州ハノーヴァーのダートマス大学（Dartmouth College）の1年に編入した。朝河は、東京専門学校在学中の1893年6月に本郷教会でキリスト教プロテスタントの会衆派の牧師、横井時雄によって洗礼を受け、キリスト教徒となった。この横井の斡旋で、ダートマス大学の学長で牧師のWilliam Jewett Tuckerの好意を得て、留学が実現した。渡航費は、恩師の大西祝や大隈重信、勝海舟、徳富蘇峰らの援助を受けた^{4), 20)}。

ダートマス大学では、1899年2月に論文*A preliminary study of Japanese Feudalism*（日本の封建制度の予備研究）を書き、1899年6月にBachelor of Letters（文学士）の学士号を取得して卒業し、同年9月にコネティカット州ニューヘイヴンにあるイエール大学（Yale University）大学院歴史学科に入学した。1902年6月、博士論文*The reform of 645: an introduction to the study of the origin of Feudalism in Japan*（大化改新：日本における封建制度の起源の研究序説）により学位（Doctor of Philosophy）を授与された。同年9月にダートマス大学の講師（lecturer）となり、東洋史、東洋文明、東西交渉史を担当し

ている。翌年の1903年には、博士論文が *The early institutional life in Japan: A study in the Reform of 645 A. D.* (大化改新の研究) と改題されて出版された。1905年10月、イエール大学時代に知り合った Miriam J. Cameron Dingwall と結婚した。Miriam は、1913年に病死し、以降朝河は独身であった^{2), 21)}。

1907年9月よりイエール大学講師 (instructor) となり、日本文化史 (history of Japanese civilization) を担当する。1910年に大学院の日本文化史助教教授に昇進、1923年に比較法制史も担当、さらに1926年に独伊中世史も担当、1927年に歴史学助教教授に任命された。1930年に歴史学准教授 (associate professor) を経て、1933年に正教授待遇の歴史学研究員 (research associate with professorial rank) となり、1937年に歴史学教授 (full professor) に昇進した。1942年6月に引退し、名誉教授 (Professor Emeritus) に推された。1948年8月11日、避暑先のバーモント州 West Wardsboro の山荘で74歳の生涯をとじた。イエール大学の主催で葬儀が行われ、ニューヘイヴン市やイエール大学に功績のあった人々の眠る Grove Street 墓地に眠っている^{2), 4), 12), 20)}。

2. 日本資料収集 (1906-07) の位置づけ

a. 朝河の3つの側面

朝河の活動は、「Professor of History, Curator, Peace Advocate」という3つの言葉で特徴づけられる^{21), 22)}。「Professor of History」は、比較法制史、日本の封建制度を専門とした歴史家としての朝河を指す。歴史家としての著書に、1929年に出版された *The Documents of Iriki* (入来文書) がある。鹿児島県薩摩郡入来村の12世紀から17世紀にかけての変遷、鎌倉・室町両幕府との関係や九州の豪族との交渉を示すものが多数含まれる史料をもとに、日本の封建時代の政治的変遷と社会構造の本質を明らかにした。これが世に出るまで、封建制度は西ヨーロッパにしかないものと思われており、朝河の著書によって初めて日本の封建制度もヨーロッパと比較できることが証明されたという点で画期的な意義を持つものであった。

朝河は、日本の封建制度を理解する出発点として、欧米特にアメリカにおいて日本史学の源流となった²¹⁾。

「Curator」は、イエール大学の東アジア図書館部長を表す役職名として、現在も使用されている。第1回帰国で日本資料を収集した朝河は、1907年9月にイエール大学の講師として迎えられた。同年11月に、YULの日本・中国コレクション (後に東アジア図書館と改称) の初代部長に任命され、以降学究と並行して40年にわたって東アジア図書館の発展に精力的に取り組んだ。1942年に引退して名誉教授となった後も亡くなる年の1948年6月まで Curator として図書館の仕事が続けた^{23), 24)}。

朝河の生きた時代は、戦争の続いた時代でもあった。東京専門学校在学中に日清戦争、イエール大学大学院修了直後に日露戦争が起こっている。「Peace Advocate」とは、日本の孤立が深まる中で在米の日本人知識人として平和を模索した朝河の「個人外交」あるいは「市民外交」と称される行動を指す。第1次世界大戦の際には、日本外交を憂慮し、首相になった大隈に書簡を送り、慎重な外交を求めた。さらに、第2次世界大戦の日米開戦の前夜には、ルーズベルト大統領から天皇への親書を送る運動に取り組み、原案を起草するなどの手を尽くしたが、開戦を避けることはできなかった。1941年の国交断絶後も朝河がアメリカに留まって研究と行動の自由が保障されたのは、朝河の学問上の貢献を高く評価した同僚や有識者が、朝河を擁護したためであった²¹⁾。

b. 学生時代に始まる図書館との関わり

朝河と図書館との関わりは、朝河の学生時代に始まる。イエール大学の大学院に進学した朝河は、YULで日本語と中国語の図書の目録を作るアルバイトを行った。オーシロ・ジョージによると、朝河は、1899年と1900年の夏に図書館でアルバイトをしたという²⁵⁾。金子によれば、1900年2月に図書の整理を始めたこととされ、1902年に博士の学位を修めて母校であるダートマス大学の講師として働き始め、1903年の夏には、研究の傍ら、再びYULで図書の整理を続け、9月に

は、図書館長であった Addison Van Name へ書簡で整理の完了を報告している²³⁾。1903年9月14日付の Van Name 宛の朝河の書簡によると、中国語と日本語の資料は、目録作成、請求記号の付与、排架、冊子体目録への登録が完了し、将来の蔵書の追加や拡張がしやすいように整えたと記している²⁶⁾。朝河が YUL の図書整理のアルバイトをしていた頃、YUL には、和書約 700 タイトル、4,000 冊 (1,350 冊ほどに洋本製本済み)、漢籍 3,000 冊以上があったと推定されている²³⁾。

B. イェール大学図書館と米国議会図書館の日本資料の歴史

1. イェール大学図書館の日本資料

a. 現在の日本資料

YUL は、アメリカ国内最大規模の研究図書館である。日本資料は、現在イェール大学の中央図書館にあたるスターリング記念図書館 (Sterling Memorial Library: SML) 内の東アジア図書館 (East Asia Library) と貴重書収蔵の専門図書館であるバイネキ稀覯本・手稿図書館 (Beinecke Rare Book and Manuscript Library: BRBL) が所蔵している。とりわけ、①日本文書コレクション (Japanese Manuscript Collection)、②日本イェール協会コレクション (Yale Association of Japan Collection)、③東アジア図書館特別コレクション (East Asia Library Special Collection) の3つのコレクションが知られている。①は、本研究のテーマである朝河の第1回日本帰国の際に収集した日本資料を中心としたコレクションである。②は、第2回帰国の際に朝河の呼びかけで寄付が集められて実現した貴重書や美術品を中心としたコレクションである。③は、地図や案内書、北斎漫画などを含む江戸時代の版本を中心とした貴重書である²⁷⁾。2012年時点の東アジア図書館の管理する東アジアの資料は、中国語、日本語、韓国語があり、日本資料の蔵書の量は中国に次いで 277,284 冊を数える^{28), 29)}。

b. 基礎となった朝河の日本資料

イェール大学の日本資料の歴史は、1855年に American Oriental Society (AOS) コレクシ

ョンが Yale College Library に委託されたことに端を発する¹⁴⁾。AOS 会員で、イェール大学図書館長であった Van Name は、アメリカにおける東アジア言語教育の先駆者で、日本資料を含む東アジアコレクションを最初に発展させた。Van Name によって、日本語と中国語のカリキュラムが 1871 年から開始された。1873 年に日本語と中国語の本のために、古生物学者で日本・中国の古書コレクターであった教授 O. C. Marsh と卒業生 Frederick W. Stevens からそれぞれ 500 ドルの寄付を受け、1875-1876 年にかけて日本資料 2,700 冊を入手した。そのほとんどは江戸時代の資料であった。このほかにも Van Name は、1921 年に自らの日本資料の個人コレクションを図書館に寄贈している。1899 年 6 月にイェールの第 9 代学長に就任した Arthur Twining Hadley は、地理学、人類学、言語、非ヨーロッパ地域の歴史といった新しい分野の発展を促した。こうした新カリキュラム導入に伴う東アジアコレクションの発展の背景には、アメリカが 1898 年の米西戦争に勝利し、最初の植民地を獲得したことが挙げられる¹⁴⁾。アメリカの極東に対する関心の高まりを背景に、東アジア方面の教育の拡充を図ろうとする大学の意向と朝河の日本資料収集に対する熱意が一致して、1906-1907 年の朝河の日本資料収集が実現した。つまり、朝河がイェール大学に講師として迎えられることになったのも、朝河の提案にイェール大学が応じて日本資料が収集されるのも、東アジアにおける覇権を争う時代背景や学長など人々の関心と不可分であった。こうした、Van Name, Hadley ら 19 世紀後半から 20 世紀初頭のイェール大学の図書館長や学長が東アジアへ関心を寄せていたことは、日本資料の収集にとって大きな要素であった。

以上、イェール大学の日本資料は、戦前から AOS コレクションによってほかのアメリカの図書館に先んじて寄贈を中心に発展していたが、選択購入による組織立った収集は朝河によって初めて行われた。戦時中は、収集した日本資料が朝河によって整理、管理され、戦後のさらなる蔵書の発展を準備した。戦後は、朝河の各時代にわたる

日本史や文明の発達についての幅広い収集の蓄積をバネに、現代の資料を加えていくことで、日本資料が着実に発展を遂げた。そのきっかけを作ったのは、ほかでもない朝河による日本資料の収集であった。

2. 米国議会図書館の日本資料

a. 現在の日本資料

LCは、1800年に創設された。現在、国立図書館として世界最大規模の図書館である。LCにおける日本資料を管理する部門は、1931年にDivision of Chinese and Japanese Literatureが設置された後、名称の変更が続いたが、1978年にAsian Divisionとなって現在に至る³⁰⁾。今日、日本資料の大部分はAsian DivisionのJapanese Sectionが管理している。Asian Divisionの管轄するほかのアジア地域資料には、中国、韓国、チベット、モンゴル、南アジア圏、東南アジア諸国、太平洋諸島のものがあり、全体で300万冊を超える資料を所蔵していて、アジア以外で最も包括的であるとされる³¹⁾。2011年の時点で、日本資料は1,189,218冊を所蔵し、Asian Division最大のコレクションを形成している^{28), 30)}。

b. 朝河に始まる日本資料の組織的収集

日本資料の収集については、日本政府との政府刊行物の交換が行われるようになった1875年に始まって以来、小規模ながら交換が実施されていた³²⁾。朝河以前には、1905年に*Washington Evening Star*紙の記者Crosby Stuart Noyesが収集していた18世紀半ばから19世紀後半の水彩画、素描、木版、石版印刷を含む658の日本美術書のコレクションの寄贈があった^{30), 32)}。

1907年の朝河による収集は、LCにとって初めての本格的な日本資料の収集となったことを複数の文献が指摘している^{12), 30), 33), 34)}。朝河の収集は、第8代館長Herbert Putnamの時代（在任期間1899-1939）に行われたが、Putnamの時代は、第6代館長Ainsworth Spoffordの時代（在任期間1864-1897）に次いで第2のコレクション拡大の時期でもあった。有名な「グーテンベルク聖書」もPutnamの時代に購入されている³⁵⁾。

朝河の後、農務省の生物学者Walter T. Swingleによる小規模な収集が行われている。Swingleは、主に穀物の研究資料収集のため1918-1919年と1926年の2度にわたってアジアを旅行した際に、約10万冊の資料を集めたとされ、その中に農業や植物関係の日本の資料も若干混ざっていたという³²⁾。

1930年代には、1938年にJapanese Sectionのchief assistantとなった坂西志保による蔵書の発展があった。坂西は、1930-1941年にかけてLCに勤め、1937年夏に数ヶ月間日本に帰国し、購入や寄贈などで蔵書を増やしたとみられる。坂西の就任当時12,009冊であった蔵書が、退任した1941年には3倍の34,696冊に増加した。LCにおける日本資料の蔵書数は第2次世界大戦後に急増した。LCは戦後の数年間、アメリカ中央情報局（Central Intelligence Agency: CIA）の外国資料部から、約365,000冊の日本資料を受け取った。このうち5分の4は日本語の資料で、人文、社会、自然科学にわたる民間出版物と軍事資料を含む政府刊行物であった³²⁾。

以上のことから、1907年の朝河の収集以前の日本資料は、寄贈が中心であったこと、朝河による収集がLCのほかの収集の中でも9,072冊と大規模で、組織立ったものであったこと、画期的であったことがLCの日本コレクションの基礎を成すと言われる所以である。

III. 日本資料収集に至る道程

前章では、朝河の経歴と日本資料収集の位置関係および、YULとLCの日本資料収集の歴史を概観した。本章では、前章を踏まえ、朝河の日本資料収集の経緯と過程について調査結果をまとめる。A節で調査方法について述べ、B節で両図書館からの具体的な委託の内容と朝河の収集方針を明らかにする。C節において、収集がどのように展開したのか、収集方法や収集のための工夫について述べる。

A. 収集活動を明らかにするために用いた資料

朝河がYULとLCのために日本資料を収集す

るに至る経緯について、「朝河の提案」、「各図書館の要望」、「朝河の収集方針」、「実現のための工夫」に注目して文献調査、現物調査を実施し、考察を行った。調査に用いたのは以下の資料である。

1) 先行研究

朝河の収集活動全般について、金子²³⁾、阿部²⁾、和田¹³⁾、Kuroda¹²⁾の文献に依拠した。

2) 書簡

収集の経緯を探るために朝河の実際の書簡を調査した。書籍としてまとめられた『朝河貫一書簡集』³⁶⁾のほか、朝河の書簡を持つ以下の図書館で閲覧した。

①福島県立図書館「朝河貫一資料」

福島県立図書館にある書簡は、和文発信 64 点、和文受信 520 点、和文そのほか 11 点で計 595 点および欧文発信 471 点、欧文受信 1,421 点、欧文そのほか 42 点で計 1,934 点である。これら和文・欧文合わせて合計 2,529 点を所蔵している³⁷⁾。

②イエール大学マニユスクリプト・アーカイブ部 (Manuscripts and Archives: MSSA)

MSSA には、「Kan'ichi Asakawa papers (MS40)」に朝河関係の書簡がある。今回、朝河側の書簡だけでなく、朝河と連絡を取り合っていたと考えられる相手側に朝河関係の書簡が残されていると考え、図書館長や学長の記録類として「Librarian, Yale University records (RU120)」、「Arthur Twining Hadley, president of Yale University, records (RU 25)」を閲覧した。

③国立国会図書館

朝河が LC の代理で資料を収集することを示す米国議会図書館長 Putnam による委任状 1 点が所蔵されている³⁸⁾。

3) 図書館長年次報告

朝河の収集報告が掲載された 1907-1908 年のイエール大学図書館長年次報告 (*Bulletin of Yale University: Report of the Librarian*)³⁹⁾と、1907 年の米国議会図書館長年次報告 (*Report of the Librarian of Congress*)³⁾を用いて収集の公式表明を検討した。

4) 現物

2012 年 8 月 6 日から 10 日 (5 日間) にワシ

トン D. C. の米国議会図書館の Jefferson Building 内の Asian Reading Room にて閲覧した。2012 年 8 月 13 日から 17 日 (5 日間) にコネティカット州ニューヘイヴンのイエール大学のバイネキ稀覯本・手稿図書館 (Beinecke Rare Book and Manuscript Library) とスターリング記念図書館 (Sterling Memorial Library) 内の東アジア図書館 (East Asia Library) を訪問し、現物調査を書簡類の調査と並行して行った。

B. 収集の経緯

1. アメリカにおける日本図書館の設立構想

日本研究の資料の乏しさを学生時代からの YUL の日本資料の整理を通して認識していた朝河は、アメリカに独立した日本図書館の設置を模索し始める²³⁾。この日本図書館の設立構想こそ、朝河の第 1 回帰国の際の日本資料収集に結びつき、YUL と LC に日本資料をもたらすことになる。

1906 年 2 月に第 1 回の帰国を控えた朝河は、アメリカに日本図書館を作るために図書資料を収集することを考え、大学や図書館関係者に書簡を送った。中でも、1905 年 10 月 24 日に AOS の会長であった Daniel Coit Gilman に宛てた書簡の要点は次のとおりである。なお、金子²³⁾に依拠し、オリジナルの書簡⁴⁰⁾で補整した。

- ①アメリカが大英博物館に匹敵する日本図書館がない
- ②今のところイエール大学図書館の日本コレクションが最大の規模だが、組織立って収集されたものではない
- ③資料の不足を憂慮し、全国規模の独立した日本図書館を設置する必要性を感じている
- ④自分 (朝河) は、日本に一時帰国する予定であり、日本でかなりの仕事ができるので、アメリカの教育界、カーネギー氏やしかるべき人物の紹介がもらえれば、日本で支援を呼びかけられる
- ⑤成功の鍵は実行者と財政支援にあり、財政的支援をお願いしたい⁴⁰⁾

Gilman は、かつてのイエール大学図書館長であり、地理学教授であった人物で、当時はジョン

ズ・ホプキンス大学の名誉学長でもあった²³⁾。1905年10月31日付、Gilmanからの朝河への返信は、“朝河の提案はわかったが、ニューヨーク公共図書館、米国議会図書館、イエール大学図書館、ハーバード大学図書館などの大きな図書館のどこか1つの協力を得れば、朝河の言うような図書館を維持管理できると思われるので、独立した図書館の創設には賛成し難い”というものであった^{23), 41)}。

朝河は、同年11月17日にコロンビア大学の東アジア委員会事務局長 Franz Boas 教授に書簡を送っている。主旨は、Gilmanに書き送ったものとほぼ同様で、要点をまとめると以下ようになる。金子²³⁾に依拠し、オリジナルの書簡⁴²⁾で補整した。

- ①東洋学にとって重要な日本図書館がアメリカに存在しないことについて、日本に一時帰国するので何かしたいと考えていること
- ②東アジア学は西アジアや南アジア研究より遅れており、日本研究は中国研究よりさらに遅れている
- ③現在、日本の分野はイエールが一番と思われるが、約4,000冊の資料は組織立って収集されたものではない
- ④十分な財政的支援を受けられるならば、一般の人々や学生の集うアメリカの中枢に位置するような日本図書館を完成させたい
- ⑤Berthold Laufer 教授が収集した中国コレクションを見てからは、図書館計画だけでなく、日本に関する博物館コレクションも視野に入れて考えるようになった
- ⑥コロンビア大学に現在の中国学科のような日本学科ができれば、この図書館と博物館コレクションが最も有効に活用されるであろう
- ⑦以上から、設置場所はニューヨークとすると、アメリカ自然史博物館、ニューヨーク公共図書館、コロンビア大学がこの3機能(博物館、図書館、日本学科)を果たすことが最適と思われる⁴²⁾

朝河の提案に対して、翌年の1906年1月9日、コロンビア大学の中国学科主任教授 Friedrich

Hirth から、“色好い返事ができればと思っていたが現時点ではその兆しはみられないこと、学長や支援してくれそうな関係者に連絡をとったので、良い話があれば知らせる”⁴³⁾という内容の返信が来ている。1906年1月5日、朝河はイエール大学図書館長 John Christopher Schwab にも同様の書簡を送った。以下、金子²³⁾に依拠し、オリジナルの書簡⁴⁴⁾で補整した。

- ①日本に関する重要分野を網羅する日本資料のコレクションがアメリカのどこかに必要と思えるが、イエールはどうであろうか
- ②イエールの日本コレクションは大規模だが、組織立って集められておらず欠けているものも多い
- ③自分(朝河)が全タイトルを記録したので言えることだが、日本研究には十分でない
- ④日本研究図書館の規模に関して1868年以後の出版物を見てみると、自分(朝河)の分野だけなら約2,700円(1,350ドル)で郵送料を入れても収集できる見込みである(これは今までの主要出版社の刊行物も出ている丸善目録や雑誌上の広告を調べた経験に基づく)
- ⑤1868年以前の資料の場合、最も網羅した書誌に25,000タイトル、100,000冊が出ており、約3,000タイトルが歴史関係だが、この内のほとんどは不必要と思われる、政府刊行物の中には出版されていないものもあるが、複製できるものもあると思われる(Schwab館長の紹介状があれば、政府刊行物はほとんど入手できるであろう)
- ⑥これらの収集に必要な費用を正確に見積るのは難しいが、本代、製本代、運送料を含めて5,000ドルあれば重要な分野を網羅したコレクションが集められるであろう(その後、当然ながら資料を追加し続ける必要がある)⁴⁴⁾

この時期、すでに1905年12月末に、朝河が日本から帰米した際には、イエール大学の講師に迎えたいという内意が朝河に伝えられていた。1905年12月27日付の書簡(福島県立図書館所蔵)は、貫一の日本永住を望む父正澄への返信であるが、その中で朝河は、アメリカで期待される自分

の立場とアメリカで研究者として歩むつもりであるという自らの志向を伝えた。この書簡に、朝河が日本への一時帰国からアメリカに戻った暁には、イエール大学の東洋科を拡張して日本科を新設し、日本科を朝河に託したいというイエール大学の内意が伝えられていたことが記されている³⁶⁾。

つまり、YULのために朝河が日本資料を収集することになる以前に、イエール大学講師就任についてすでに大学側から申し出があったということになる。金子は、朝河が独立した日本図書館をアメリカに作ることを具体的な利便性や有効性を考えて要人に精力的に働きかけていたと評価している²³⁾。このような構想を持った朝河の行動力は、最終的にイエール大学とLCが日本資料の収集を朝河に委託することになって結実する。

2. イエール大学からの委託

1906年1月19日に朝河は、イエール大学のHadley学長と面会しており、そこでイエール大学の講師の仕事を受諾したとみられる⁴⁵⁾。同じく、1月19日付で、1907-1908年のイエール大学講師として朝河の立場を明らかにしたHadley直筆の紹介状⁴⁶⁾と同大学図書館長Schwabの署名の入った日本資料収集の委任状⁴⁷⁾を渡されたともみられる。委任状の要点は以下のようになる。

- ①朝河は、1906-1907の日本滞在中、イエール大学図書館の代理人としての役目を務める
- ②朝河は、イエール大学の蔵書を完全なものにするために必要な日本の出版物を購入、寄贈あるいは、交換によって、資料を入手する権限を与えられた
- ③朝河はまた、東洋の歴史や制度の研究の遂行にあたり日本人やアメリカ人の研究者の支援のもと、完成を目指しているイエール大学図書館に日本政府や学会、類似機関などから刊行物を入手する権限を与えられた⁴⁷⁾

イエール大学のコレクション構築について書いたThomas F. O'Connorは、20世紀初頭のイエール大学の資料選択について次のように述べている。この時期は、図書館資料の基金の大部分が寄付から成っており、教授陣よりも図書館長が寄付

金をコントロールしていた。したがって、コレクション構築には教員も参与していたが、図書館によって購入される資料の3/4は、図書館長によって選ばれていたという。したがって、イエール大学の図書館長は、当時の一般的な学術図書館の館長らよりも、コレクション構築により影響力を発揮できたことが推察されている¹⁰⁾。

O'Connorはまた、コレクション構築方針について次のように述べている。イエール大学を含むアメリカの学術図書館は、この時期コレクション構築方針を書面では作成していなかった。したがって、イエール大学の場合、方針の基本要素は、図書館長の書簡、年次報告、出版物、実際のコレクション構築の活動などからつなぎ合わせて考えることができるであろうとしている¹⁰⁾。

この時期のイエール大学は、特殊コレクションの内容に単一のパターンがあるわけではなく、入手できる方法に依っていた。ほとんどは、直接寄贈されたか、特定の資料を購入するために請求した寄付を通して入手していた。つまり、朝河の日本資料は、大学の資金の一部で購入された数少ないコレクションの1つであったということである¹⁰⁾。

以上のことから、イエール大学は、朝河から日本図書館の設置場所として打診され、それを受けて朝河に日本資料収集を委託し、委任状を用意した事実がわかった。しかし、イエール大学独自のコレクション構築について具体的な要望があったのかは定かでない。朝河に委託することは決定したが、具体的な収集方法については、朝河に一任したものとみられる。断片的な手がかりとして、LCの館長Putnamは、1906年1月20日付の朝河宛の書簡で、両図書館の性格の違いから2つのコレクションの中身がまったく同じにはならないであろうとし、イエール大学が教育に直接用いるコレクションの収集になるであろうと述べている¹²⁾。米国議会図書館長年次報告では、イエール大学への収集について、朝河が大学図書館に有用であろう日本資料の収集に着手したとしている³⁾。したがって、イエール大学は、大学図書館という性質上、研究や教育に使用できる資料を求

めていたと考えられ、資料選択のかなりの部分を朝河の裁量に任せたと考えられる。

3. 米国議会図書館からの委託

Kurodaによれば、LCの館長Putnamは、朝河に日本コレクションを視察してもらい、委託について話し合うため、朝河をワシントンに招いたとされる¹²⁾。

朝河は、1906年1月20日付の書簡で、Putnamから正式にLCのための日本資料の収集を依頼された。この書簡によって朝河がYULだけでなく、LCのためにも日本資料を集めることになった経緯がわかる。この書簡でPutnamは、イェール大学の図書館当局の提案により、LCのために日本資料の選択と手配、収集を朝河に依頼することとしたと記している。具体的には、次のような条件や契約である。

- ① 将来かなりの規模になると思われる日本部門の基盤となるものを望んでいる。しかし、今すぐに使われるとは思われないので、本質的に短命な資料や重要でないもの、二次資料は必要ない
- ② 日本の歴史と制度を知る上で最も中心となる資料を厳選する
- ③ 正式な日本の文献の中でも、より重要な著作を選択する
- ④ 購入予算は5,000ドルまでとし、日本で行う製本代を含む（輸送費用は別としていい）
- ⑤ 送金は、領収書を受け取ってからの後払いとなる
- ⑥ 朝河への報酬は、総支出の10%以上とする（購入予算の5,000ドル以外から出るものとする）
- ⑦ 公文書や学術機関の出版物などは、寄贈あるいは、交換で入手し、収集を促進する
- ⑧ アメリカの国立図書館としての米国議会図書館の目的や蔵書や運営方針について、（朝河が）説明する機会があるであろう。それは、間接的に将来の米国議会図書館のコレクションを増やすことにつながるであろう¹²⁾

Putnamはまた、委任状を書いており、このよ

うなLCの意向は、1906年1月18日付のPutnamからの委任状にも、現れている。

朝河は、東洋に滞在中、米国議会図書館の特別代理人として行動する。

- ① 寄贈および交換による資料収集の調整
- ② 購入資料の選択
- ③ 学術機関のハンドブック編集のための学術機関に関する情報の収集
- ④ アメリカの国立図書館としての米国議会図書館の特徴、活動範囲、目的に関心を持つであろう人々に説明すること

米国議会図書館はこれらの目的を促進するであろう朝河に対して、便宜と配慮が提供されることを希望する。以上に関して朝河に示されたサービスは、米国議会図書館やアメリカ政府やアメリカの研究者のために示されたものと考えられる³⁸⁾

以上によって、LCは朝河に委託することを決定ただけでなく、資料の種類、製本代、報酬などの具体的な条件を提示していたことがわかった。ただし、収集方法については、YULと同様に、購入あるいは寄贈か交換によって入手すること以外、触れられておらず、朝河に一任したものとみられる。米国議会図書館長年次報告は、国立図書館における広範な利用に適したコレクションを収集するという使命を朝河が負ったとしている³⁾。つまり、条件の範囲内でどのような資料を選択するかは、朝河の判断に委ねられたと考えられる。

4. 朝河貫一の収集方針

1907年の米国議会図書館長年次報告には、「朝河の収集方針」が示されている³⁾。それによると、第1に収集の目的は図書館に単なる稀少本や珍本を集めるのではなく、日本の文芸、歴史、制度を学ぶ学生にとって良い「作用をもたらす」コレクションを備え付けることであるとしている。

第2に、朝河には貴重書についての原則があった。朝河の適用した選書基準は、ただ1つだけ伝わった天下の孤本のように、1つのコピーしか存

在しないものやほかに替えがないものは、どんなに重要な著作あるいは文書であっても、日本から持ち出さないこととし、ただ単にそれらが珍しいからという理由で、稀少本を探すことを目的としないというものである。この原則にしたがって、台密の有名な僧の日記である『幽明日記』と1573年の日付のある「京都文書」は、原本のため早稲田大学図書館に譲り、後者は筆写してもらったことを例に挙げている³⁾。

この収集方針により、朝河が何を集めようとしていたのかを知ることができる。すなわち、日本について研究する学生にとって有用な資料である。稀少本の収集を目的としないことから、個人的な趣味の収集ではなく、資料の利用を想定した収集を念頭に置いていたとみられる。

5. 朝河の意図

以上の収集の経緯を整理すると、朝河が少なくとも1905年10月には日本図書館構想を持っていたことが明らかであり、それはイェール大学への奉職やYULとLCのための日本資料の収集が決まる前から温められていたことがうかがえる。初めからYULやLCへの収集を想定していたわけではなく、日本資料の収集先として相応しい所を探していたところにこの機会をとらえて応えたのがYULとLCであった。結果的にYULやLCから依頼されたことは事実であるが、依頼されたから集めたのではなく、朝河からの提案を受けて初めて実現したことであり、朝河の冷静且つ、熱心な働きかけが出発点にあったと言える。すなわち、朝河の収集は、ただの思いつきでなく、構想を実現するために働きかけるべき人物を知っていたこと、予算の見積りや目録などを事前に調査していたことが成功の要因であったと考えられる。学生時代の図書館のアルバイトで得た知見を引き合いに出すなど説得力のある提案をしている様子うかがえる。

YULやLCとのやりとりから、収集方法や資料選択の大部分は朝河の判断に一任されていたと考えられる。米国議会図書館長年次報告書に示された収集目的や貴重書の選書基準といった朝河の

収集方針は、YULやLCの委託と要望を踏まえて設定したものと考えられる。

C. 収集の過程

本節では、朝河がコレクションをどのように集めたか、収集のためにどのような工夫をしたかに着目して、収集過程を考察する。

1. 収集の展開

1906年2月1日にシアトル港を出発した朝河は、2月16日に横浜港に到着した。東京で日本資料の収集計画を練った後、2月21日から23日に日光、23日から郷里の二本松に滞在し、3月7日に東京に戻り、本格的に収集と研究活動を開始した²⁾。

1906年3月14日 Schwab 宛の朝河の書簡⁴⁸⁾によると、朝河はまず、母校である早稲田大学の図書館の一角にオフィスと収集資料の保管場所を提供してもらった。朝河の仕事に早稲田大学が関心を示して、援助を約束してくれた。そして、各主題の第一人者に助言を求めるつもりで、すでに影響力のある人物を何人か見つけたとも記している。収集は、政府の資料から始めようと思うとしており、そのいくつかは封建制度についての資料で刊行されていないため、代わりに書き写すしかない資料である。ほかの資料については、最も公共心に富む出版社を通して購入するつもりであると記している。随時の支出やコピーのための資金が必要であると報告し、同じく Schwab 宛の1906年3月19日の朝河の書簡⁴⁹⁾などにおいても、アメリカ公使館を通して首相の西園寺公望へ紹介状を送ってもらい、文部省や学会、類似機関を通して政府の各省庁を回り、出版されていない資料の入手に努めるという報告とともに、資金を催促している。興味深い内容として、イェール大学のために入手したいいくつかの本を参考と探索のためにしばらく手許に置くことを特別に許可してほしいと記述している。資料名は書かれていないが、ほとんどが総記の本で書誌的特別参考図書であり、入手に役立つものであると理由を述べている。

朝河は、1906年4月6日、朝河の英文著作『日露衝突』を出版した出版社ホートン・ミフリン社（後のマクミラン社）の編集者で親しくしていたWilliam Stone Booth宛の書簡（イエール大学図書館所蔵）においても、イエール大学とLCから大規模で組織立った日本資料のコレクションを日本滞在中に収集することを依頼されたこと、両図書館が寄贈や交換で受ける資料以外に8,000ドルから10,000ドルの図書購入予算をかける計画で、海外では最も充実した日本図書館になると思われること、各専門分野の第一人者の助言を受けてこのコレクションをあらゆる面で徹底的に組織立ったものにするつもりであることを書き送っている³⁶⁾。

イエール大学は資料購入資金の工面に苦勞し、朝河とSchwabの書簡には資金調達についてのやりとりが散見される。朝河は日本滞在1年目に、200ドル、1,000ドル、500ドルと3回に分けて計1,700ドルを受け取っており、1907年4月に送金された1,500ドルと合わせて、最終的にイエールからの資料購入費の総額は3,200ドルとなったとみられる^{50), 51)}。

1906年5月初めには、横井時雄の斡旋により、東京で文部大臣の牧野伸顕、衆議院書記官長の林田亀太郎、清浦奎吾男爵ら要人に面会し、日本資料の収集に対して協力を要請した²⁾。帝国大学文科大学史料編纂掛にも通い、史料編纂掛事務主任（現在の史料編纂所長にあたる）であった三上参次から可能な限りの便宜を図ってもらい、そこで1906年の夏の3ヶ月間、常に半日を約20人の写字生を雇って写本から複製を作る作業を行った⁵²⁾。朝河がどのようにして写字生を雇ったかまでは書かれていないが、史料編纂掛の「職員録」によると当時の史料編纂掛が写字生を抱えていたことがわかる。朝河の日本滞在中にあたる1906年度、および1907年度の職員にそれぞれ42人の写字生がいた⁵³⁾。朝河は、京都や奈良など関西方面へも足を延ばし、京都の蔵経書院から購入した『大藏経』やその補遺『続藏経』をはじめ、多くの資料を入手した⁵⁴⁾。その間に、早稲田大学で英語講師を勤め、同大学で村上专精の仏教史の講義を

聴くこともあったという²⁾。朝河は1907年8月7日、横浜港からアメリカへの帰路についた⁵⁵⁾。

2. 収集方法、収集先、日本国内の協力

イエール大学図書館長年次報告によれば、収集方法は、寄贈、交換、購入であった。資料の多くは、写本で、そのほとんどが市場に出回っておらず、日本各地の所有者から入手したか、原本あるいは状態の良い写本から特別に書写したものである。書写は、東京および、西日本一帯の15の寺院、図書館、公共施設で行われた。日本国内では、日本政府、特に文部大臣牧野伸顕、地方の役所、日本各地の専門家、さまざまな宗派の仏教徒、帝国大学のさまざまな学科の大家、特に史料編纂掛事務主任の三上参次の支援を受けた³⁹⁾。

米国議会図書館長年次報告によると、出版物を経済雑誌社や近藤出版部、逐次刊行物を博文館や吉川弘文館、編纂史料を帝国大学文科大学史料編纂掛、改訂版などを国書刊行会から、仏教書を蔵経書院（京都）から入手した。日本における仏教の資料は、著名な仏教徒の学者の助言を得ながら収集した。

収集資料の大部分を占める写本は、古書店業者や所有者から、あるいは原本や良い状態の写本から特別に書写して入手した。これらの著作は、絶版や多くが稀少本であったため、朝河は日本各地に何度も足を運んだ。朝河の監督下あるいはほかの場所で写字生によって特別に書写された写本もある。すなわち、早稲田大学図書館、司法省、高野山の僧院、長崎市役所、名古屋の県庁、帝国大学文科大学史料編纂掛などの所有する写本である。

文部省（現在の文部科学省）や司法省（現在の法務省）、内閣をはじめとする日本政府の各省庁は、朝河を通して惜しめない寄贈をした。

日本の伝統的な製本である和装本は、西洋の図書館にとって取り扱いに不便なので、洋風に改めるのが最適と考えて洋装にした。洋装本への製本は、朝河の監督下でしかるべく行われ、その結果、もとの薄く柔らかい和装本から合綴されて数が減少し、書架にも縦に並べられるので少ない空間で

排架できるようになった。しかし、芸術的理由などで特に原形保存が望ましい場合には、洋装にはしなかった。

この日本コレクションの創設を成した朝河の成功は、偏に、日本政府の大臣や官僚、帝国図書館、内閣、大学、私立図書館の司書、史料編纂掛の史料編纂官、早稲田大学の専門家、多くの個人の資料提供の支援によるものであるとしている³⁾。

3. 装丁にみる朝河貫一の方針と収集過程の痕跡

洋装の製本や朝河が書写させた資料などの図書館長年次報告に示されたコレクションの特徴を見極めるため、一部ではあるが1907年前後の写本を中心に現物を確認した。そのほかに、蔵書票、受入印、折本、巻物などの装備や装丁にも注目して現物の特徴から朝河の方針と収集過程の痕跡を考察した。

a. 蔵書票と受入印

YULの朝河の収集した資料には、表紙見返しに蔵書票があり、“1907”と手書きされた収蔵年を確認することができた(写真1)。LCの朝河の収集した資料には、裏表紙見返しの右上の端に年月日の受入印が押されていた(写真2)。いずれも、近年の目録において朝河収集資料の認定の根

拠になったものである。

b. 洋装本の例

YULとLCの朝河の収集資料で、閲覧できたうちの1907年に書写した資料と古い写本や刊本は、和装を洋装にしたものであった。YULとLC双方に重複していた資料の1つであり、江戸時代の雑史で1907年の書写と推定される『統談海』を洋装本の例に挙げた(写真3、写真4)。製本の状態は両者とも変わりなく、同じ書名の袋綴じの和装本を幾冊かまとめて1冊の洋装にしていた。いずれもハードカバーで書架に立てて並べられるようになっており、背には日本語の書名が刻印されている。

朝河が米国議会図書館長年次報告で報告しているとおり、西洋人が和装本を本として認識できるように、和書の取り扱いに困らないよう、洋書の形式にできるだけ近づけようと工夫した結果であると言える³⁾。

c. 洋装本以外の例

折本や巻物についても洋装本との比較のため閲覧した(写真5、写真6)。これらの装丁から、朝河の方針を読み取ることができる。例えば、写真6の『応永三十二年具註曆〔紙背は後亀山帝元徳二年曼荼羅之訣〕』は、応永32年(1425)の『具注曆』の紙背に『元徳二年後宇多院聖忌曼荼羅供』が書かれているという1つの巻物に2種類の

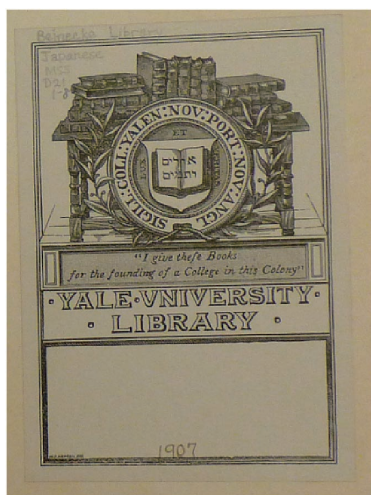


写真1 蔵書票: イェール大学図書館蔵『談海』¹⁾

1 Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University

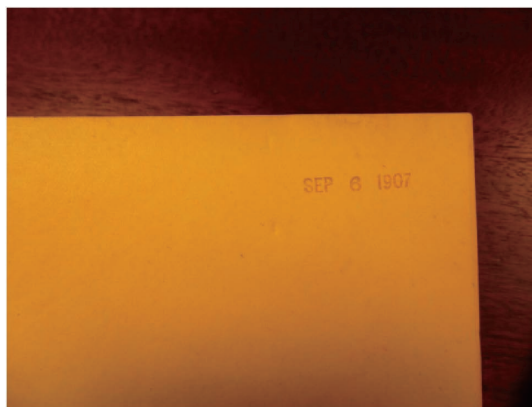


写真2 受入印: 米国議会図書館蔵『後二條師通記』¹⁾

1 Call Number: DS856.72.F836 A3 1907 Japan Cage
議会図書館アジア部コレクション所蔵

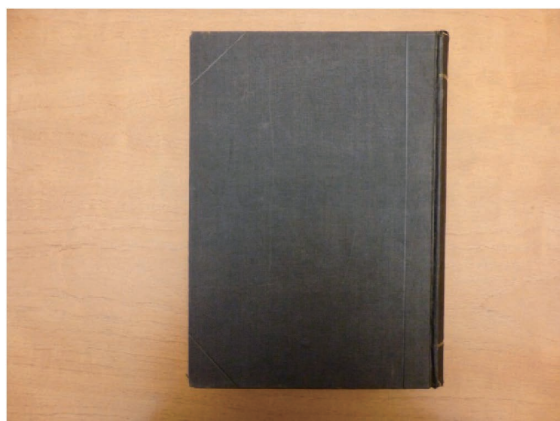


写真3 洋装本: イェール大学図書館蔵『続談海』の表紙¹

1 Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University



写真5 折本: イェール大学図書館蔵『指南車』¹

1 Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University

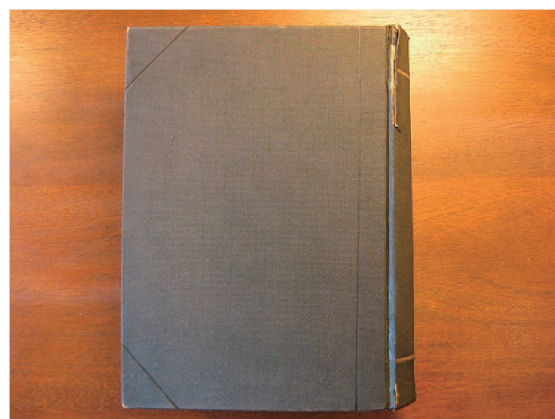


写真4 洋装本: 米国議会図書館蔵『続談海』の表紙¹

1 Call Number: DS872.Z64 1907 Japan Cage 議会図書館アジア部コレクション所蔵

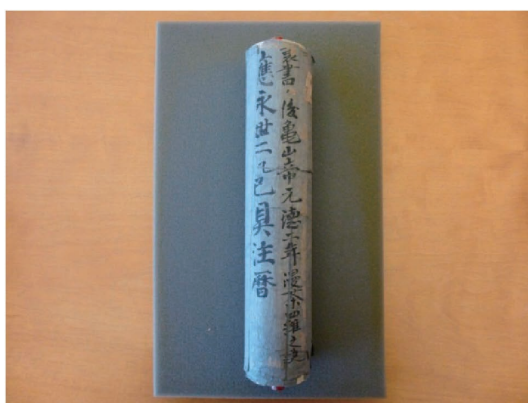


写真6 巻物: イェール大学図書館蔵

『応永三十二年具註曆〔紙背は後龜山帝元徳二年曼荼羅之訣〕』¹

1 Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University

文書が記録されているものである。『元徳二年後宇多院聖忌曼荼羅供』は、元徳2年6月に行われた後宇多院の7回忌の曼荼羅供の法会儀礼の準備と当日の次第を記録したものである。後宇多院は後醍醐天皇の父で、鎌倉最末期の南北朝の動乱に至る時代の法事法要記録として貴重とされる¹⁹⁾。

すなわち、資料によっては洋装にしていなかったことが実際に確認できた。資料の価値を尊重し、配慮している様子がうかがえる。

d. 書写して収集した写本

1907年前後と思われる写本を閲覧したところ、料紙が新しいこと、一部に朝河が書写させたことを示す書入れがあったことから朝河がわざわざ書写して集めた資料であると推定した。すなわち、写本に2種類あったということである。1つは、もともとの手書きのオリジナルあるいは古い時代の写本である。もう1つは、朝河が収集時に写させた写本である。両図書館長年次報告に朝河が書

写して収集していたとあるとおり、実際に書写した資料があることを確認できた。先行研究や目録では、写本を区別していなかったが、わざわざ書写してまで集めたということは、朝河が何を大切に考えて収集したのかを知ることができる点で、重要であると考ええる。

e. 朝河の書入れ

1907年頃に書写された資料から、書写した写字生の書入れなどの痕跡は見当たらなかった。その代り、和文、英文の手書きや英文タイプによる朝河自身の書入れのある資料が何点か見つかった。書入れの場所は、いずれも資料の最後尾の遊び紙にあたる白紙の部分であるため、本文には影響がない。書入れの内容は、どれも一貫しており、どのようにその資料を入手したかということが書かれている。例として、『伍人組異同弁』と『徳川幕府県治要略』を取り上げた(写真7, 写真8)。

『伍人組異同弁』には、英文の手書きで次のように書いてある。

Copied specially for Yale, under my supervision, from the original and only copy kept at the Department of Justice, Japan

K. Asakawa

1906

オリジナルと唯一の写本を保管している日本の司法省から、私の監督下で、イエールのために特別に写した。

K. Asakawa

1906

『徳川幕府県治要略』には、和文と英文両方が併記されているが、和文の手書きで以下のことが記されている。

著者には面識がないが、知友遠藤芳樹氏を介して原本よりこれを写させた。

これは日本初の複本である。やがては東京帝国大学のためにも一部写させようということである。

明治四十年七月 朝河貫一

資料そのものの価値に加えて、このような入手時の書入れが残されている資料は、朝河がどのような人脈を使ってどこから資料を入手したのかと

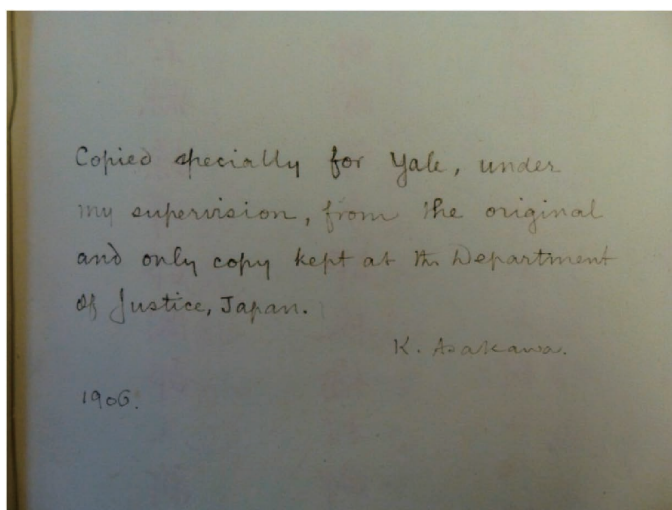


写真7 朝河の書入れ: イエール大学図書館蔵『伍人組異同弁』¹
1 Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Yale University

5. 同時代のコレクションの評価

収集に対する評価として、イエール大学図書館長年次報告では、“イエール大学は、根気強く、先見の明のある朝河の行動に、多大な恩恵を受けた”³⁹⁾としている。同様に、米国議会図書館長年次報告は、“LCのコレクションは、朝河の関心と公共心に負うものである”³⁾としており、両者ともコレクションを実現させた朝河の手腕を高く買っている。

さらに、米国議会図書館長年次報告書には、コレクションに対する朝河自身の評価が見受けられる。

In conclusion I may say that the collection, which contains some 9,072 works, while it is by no means complete but has several gaps which should be filled, may be regarded as a foundation of a Japanese Library more perfect than can be found anywhere else outside of Japan.

結論として、コレクションは約9,072冊を数えたが、完全ではなく、欠けている面もある。しかし、日本以外の国で、最も完成した日本図書館の出発点とみなしてもいいであろう³⁾。

この文面から、収集の成果に対する朝河の率直な気持ちが読み取れる。朝河は、自らが抱いていたアメリカに日本図書館を作りたいという強い希望を持って収集を遂行した。人々を説得し、支援を受けながら、努力と工夫で集めた資料は、人々の利用に供することのできるものであったと解釈できよう。“欧米に対して東洋を解釈せん”³⁶⁾という使命を自らに課し、ライフワークにしようとしていた朝河にとって、一生をかけた事業の出発点にYULとLCへの日本資料の収集があったと言える。つまり、アメリカが日本に対する理解を深めるための「日本コレクション」を収集したと考えられる。

IV. 実現したコレクション

A. コレクションの特徴を明らかにするために用いた資料

両図書館の蔵書の特徴を明らかにするために、YULとLCの近年作成された日本コレクションの目録から、朝河の収集した資料を抽出し、分類、写本・刊本の年代、両コレクションの重複資料などを分析した。分析から明らかになった特徴を先行研究や両図書館長年次報告での報告内容と比較検討してコレクションの意義を考察した。

YULについては、国文学研究資料館の『調査研究報告』no. 11に収録された「イエール大学蔵・日本文書コレクション目録」(1990)を調査対象とした。この目録は、1987-1989年の3年間に行われた調査をもとに作成された¹⁶⁾。目録の収録対象である「日本文書コレクション (Japanese Manuscript Collection)」は、主として1907年に朝河の収集した資料であるが、その前後に収集されたものも若干含まれている。ほとんどは、バイネキ稀覯本・手稿図書館 (Beinecke Rare Book and Manuscript Library: BRBL) の General Collection の1つとして所蔵されている。一部の資料は、スターリング記念図書館 (Sterling Memorial Library: SML) 内の東アジア図書館 (East Asia Library) の所蔵である¹⁶⁾。目録全体の収録タイトル数は、約692タイトルである。目録にタイトルの記載があるものの、未調査とされた資料が4タイトルあったが、Yale University Library Catalog (Orbis) でタイトルを検索したところ、注記に“Yale bookplate date: 1907”とあり、1907年の蔵書票であることが確認できたのですべて調査対象に含めた。1907年以外の年の蔵書票のある資料6タイトル (1873年, 1891年, 1942年各2タイトルずつ) と蔵書票のない資料1タイトルがあった。これら計7タイトルは、調査対象から除いた。全体像を把握するため、i) タイトル数と冊数、ii) 写本と刊本の別、iii) 写本と刊本の年、iv) 分類の4点を分析項目に設定した。合綴されている場合、タイトル数は個々の書名で数えることとした。写・刊年は、Orbisを

用いて特定できるものは補足した。分類の特定には日本古典籍総合目録データベースを用いた⁵⁷⁾。LCの目録が主に『内閣文庫国書分類目録』に依拠していたので、LCとの比較を可能にするため、日本古典籍総合目録データベースで特定できた分類を『内閣文庫国書分類目録』の分類に当てはめる作業を行った。

LCについては、『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』(2003)を調査対象とした。この目録によってLCの日本古典籍の全貌が初めて明らかになった。朝河の収集資料を含むこの目録は、1998-2000年度の3年間に行われた書目調査および、2001年の追加調査をもとに作成された。収録範囲は、LCのAsian DivisionのJapanese Sectionが管理する資料のうち、一般に「日本古典籍(Japanese Rare Books)」と称される書物群である¹⁷⁾。目録全体の収録タイトル数は、4,795タイトルである。目録には、朝河の収集した資料である場合「[朝河]」という表示が記載されていたので、各書目の記述に「[朝河]」とあるものを抜き出した。抽出後、1907年以外の年の受入印のある資料3タイトル(1909年、1934年、1938年が各1タイトルずつ)と受入印の確認ができない資料が2タイトルあった。これら計5タイトルは、調査対象から外した。全体的な傾向を探るため、i) タイトル数と冊数、ii) 写本と刊本の別、iii) 写本と刊本の年、iv) 分類の4点を分析項目に設定した。写・刊年は、奥書あるいは刊記の記載のある資料はこれに拠った。序や跋にしか年がない場合は、厳密を期すために年として採用しなかった。分類は、目録の分類が主として『内閣文庫国書分類目録』に拠っていたので、これに準ずることとした。なお、主題や内容に関しては、『国書解題』、『国史大辞典』、仏教に関して『佛書解説大辞典』、『日本仏教典籍大事典』などの解題書誌を適宜参照した。

本研究における時代区分はYULおよびLCともに第1表のとおりである。

第1表 時代区分¹⁾

時代区分	年代(西暦)	年号	
中古	1191年以前	建久以前	
中世	1192-1595	建久～文禄	
近世(江戸時代)	初期	1596-1643	慶長～寛永
	前期	1644-1703	正保～元禄
	中期	1704-1788	宝永～天明
	後期	1789-1843	寛政～天保
	末期	1844-1867	弘化～慶応
近代	1868-1912	明治	
	1913-1925	大正	

1 堀川⁵⁸⁾および杉浦⁵⁹⁾を参考に作成。

B. イェール大学図書館のコレクションの特徴

1. イェール大学図書館長年次報告との比較

イェール大学図書館長年次報告によると、朝河がイェール大学のために収集した日本資料は、洋装本8,120冊(3,578タイトル)、1,741枚の地図、742枚の写真と図面類、いくつかの巻物であった^{39), 60)}。金子によれば、洋風に製本される前の和装の状態では21,520冊と推定され、日本で洋風の装丁に改められたという。これに対し、今回の目録調査では1,091冊(685タイトル)となった。イェール大学図書館長年次報告に比べて目録の収録数が少ないのは、目録が現在のBRBLの所蔵する「日本文書コレクション」の収集資料に限られているためと考えられる(E節で後述する)。

写本と刊本のタイトル数は、写本が約97%と全体に占める割合が高く、イェール大学図書館長年次報告において、“大部分は写本である”³⁹⁾と言われているとおりの結果となった(第2表)。

収集資料は、イェール大学図書館長年次報告において、日本の文明化の歴史を伝える各時代の資料と日本の最近の事情に関する資料とに大別され、前者の方が大部分を占めると報告されていた³⁹⁾。さらに、“史料、研究書、文書(大量の写本と数点の原本を含む)、碑文、同時代の記録と回想録、後に編纂されたものなどは、日本においてさえ珍しい量であると考えられる。著作物、地方史、風俗習慣の歴史、交易史、宗教史、国民の生活の様子についても非常に多い”ということである。

ある³⁹⁾。

年次は、不明を除いて近世の江戸時代後期から明治にかけての資料が多いことがわかった。イエール大学図書館長年次報告で言及されたよう

第2表 イエール大学図書館の写本と刊本のタイトル数

	タイトル数	全体に占める割合 (%)
写本	665	97.1
刊本	17	2.5
不明	3	0.4
合計	685	100.0

第3表 イエール大学図書館の写本と刊本の時代別のタイトル数

時代区分	写本	刊本
中世	7	0
江戸初期	7	0
江戸前期	24	1
江戸中期	39	1
江戸後期	178	2
江戸末期	180	1
明治	77	6
不明	153	6
合計	665	17

に、最近の事情（明治時代）に関する資料よりも日本の文明化の歴史を伝える一次資料が大半を占めていると考えられる（第3表）。

分類別のタイトル数は、1位の歴史と2位の政治・法制・附故実が全体の6割強を占める結果となった（第4表）。イエール大学図書館長年次報告において“日本の制度の発展に関する資料が特に強みである”³⁹⁾と書かれていたことの裏づけになると考えられる。

主な分類の詳細別タイトル数は、第5表のようになった。歴史では主に公家や武家、幕府の記録や歴史、伝記、日記といったもの、政治・法制・附故実では主に各種の法度や評定所の規則、有職故実、武家故実などが中心である。地理はほとんどが地誌で、諸々の風土記を含んでいる。文学はほぼ随筆が占めるが、江戸時代の随筆は一種の考証のようなものであったため、歴史資料を補完する意味合いが強いように思われる⁶¹⁾。武学・武術の資料は大部分が兵法で、厳密には武家社会の仕組みを表す資料ではないかと思われる。

つまり、分類上区別をつけられるものの、ほとんどが日本の制度の発展に関する資料であること

第4表 イエール大学図書館の分類別のタイトル数

順位	分類	タイトル数	全体に占める割合 (%)
1	歴史	182	34.5
2	政治・法制・附故実	149	28.2
3	地理	38	7.2
4	文学	35	6.6
5	武学・武術	33	6.3
6	産業	19	3.6
7	仏教	17	3.2
8	神祇	12	2.3
9	経済	11	2.1
9	諸芸	11	2.1
11	教育	9	1.7
12	漢籍	4	0.8
13	総記	2	0.4
13	芸術	2	0.4
15	言語	1	0.2
15	音楽・演劇	1	0.2
15	理学	1	0.2
15	医学	1	0.2
19	準漢籍	0	0.0
	合計	528	100.0

第5表 イェール大学図書館の上位の資料の主な分類の詳細

1次区分	2次区分	タイトル数
歴史	記録	30
	雑史	30
	伝記	27
	日記	25
政治・法制・附故実	法制	80
	有職故実	16
	武家故実	14
地理	地誌	27
文学	随筆	22
武学・武術	兵法	12

を示す資料群であると言える。それではなぜ、制度史の資料を集めたのであろうか。考えられる可能性が2つある。1つには、朝河の収集した1906年から1907年は、1905年の日露戦争を経て、海外の国々から日本が近代国家として見られるようになった頃で、その近代化に注目が集まり始めていた時期である。どのように日本が近代化できたのかを知るために、各時代の制度史の資料を収集したと考えられる。2点目に、イェール大学の歴史学の教授方法が制度史を学習できる体制をとっていたということも挙げられる。朝河は、大学院の進学の際、イェール大学のほかにハーバード大学などにも願書を出しているが、最終的にイェール大学を選んだ決め手となったのが、歴史学の教授方法の違いであった。オーシロによれば、朝河は友人に宛てた書簡の中で“ハーバードでは歴史を時代別に研究する方法を取り、(彼が望んでいるような)制度を研究する方法をとらない”²⁵⁾からであると理由を述べている。つまり、朝河はイェールの教授方針に即した資料を集めたとも言える。

2. イェール大学図書館の一次資料

第5表で示した分析結果により、日本史に属する資料は、史料として研究に用いることのできる一次資料であると言える。イェール大学図書館長のSchwabからの委任状では、イェール大学の日本資料の蔵書を完全なものにするため、日本資

料の収集を依頼するとしていた⁴⁷⁾。米国議会図書館長Putnamは、朝河に収集を依頼する書簡を送った際、イェール大学へは直接教育に用いるコレクションを収集すると思われるが、と前置きしてLCの本題に入っている¹²⁾。Putnam館長には、一次資料の収集を依頼されていたが、なぜYULにも一次資料を集めたのであろうか。その理由について、朝河の受けた歴史学方法論の講義とその影響による朝河自身の研究方法に一次資料を集めた手がかりを見出せるのではないかと思われる。

オーシロによると、歴史学方法論について朝河が最も影響を受けたのは、イェール大学のEdward Gaylord Bourne教授であるという。Bourneの研究方法は、「すべて原典にあたって歴史を検証する」こと、「資料が真正であること」を証明するというものであった²⁶⁾。朝河の最新の評伝を書いた山内は、朝河が“真正な原史料による検証と歴史批評の重要性の双方の重要性を教えられてきた”と指摘している²⁰⁾。Bourneから歴史学方法論を学んだ朝河は、原史料を扱う意義について、1912年3月24日付の三上参次宛の書簡(イェール大学図書館所蔵)で次のように述べている。

原料ハ史ニあらず、原料の蒐集の終はる所、即ち史学の始まるところと承はり候が、その史学ハ原料の内容の按排の如きことは初歩といたすべき義ニ存候³⁶⁾

山内は、朝河が“史学は正しい史料収集が半分で、後の半分は「批判分析」研究”と考えていると解釈している²⁰⁾。つまり、朝河のYULのための収集は、研究の材料となる生の一次資料を豊富に集めることで、日本を研究する学生や研究者がその原典を用いて研究できるように準備をしたのではないかと考えられる。

朝河の日記を研究している増井由紀美は、この書簡においてまず朝河が“原史料は単に用いられるだけでは意味がなく、批判分析が施されて初めて生きるものである”とし、“学者間で批評し合いながら互いに高め合うべきである”と主張して

いるとしている⁶²⁾。原史料を用いて、批判分析するという朝河の姿勢は、イエール大学における朝河の講義において実践されているように思われる。朝河の講義については、増井による研究がある。それによると、原史料に沿った講義を心がけ、日本語のリテラシーのない学生に古典史料などを翻訳して提供し、受講者には客観的な事実に基づいた論文を要求した朝河の教師としての側面を紹介している⁶³⁾。

例えば、1908年度には、学部生向けに「日本の美術、思想、習慣の歴史」という講義を担当している。内容は、書物、講義を通して図説などを用いての宗教、哲学、文学、美術、習慣、行儀作法、それらの相互関係、思潮、人々の生活の様子などの分析である。後年の法制史の講義では、ゼミで「原材料」の中から適当な文を選び、予習させて教室で討議するという方法をとっていた⁶³⁾。

朝河の史学方法論や実際の講義から、朝河が一次資料を重視していた様子を読み取ることができる。一次資料から研究することを大切にしていた朝河の姿勢は、収集においても発揮されたとみられる。つまり、朝河は日本を研究する学生や研究者のために、一次資料を重要であると考えて収集したということが推測できる。

C. 米国議会図書館のコレクションの特徴

1. 米国議会図書館長年次報告との比較

Kurodaによると、LCのための収集資料は洋装本9,072冊(推定3,160タイトル)で、和装であった時には約45,000冊と推定される^{12), 64)}。しかしながら、今回調査した目録では、1,008冊(645タイトル)となった(E節で後述する)。

写本と刊本のタイトル数は、米国議会図書館長年次報告では収集資料の多くが写本であるということであったが、目録では刊本が約46%あり、写本の方が約54%と多いが、ほぼ半々の割合である(第6表)。

目録の写本と刊本の年は、不明を除外すると写本と刊本ともに概ね近世の江戸時代前期、中期、後期が中心だが、写本に関しては各時代にわたって資料が集められている様子がうかがえる(第7

第6表 米国議会図書館の写本と刊本のタイトル数

	タイトル数	全体に占める割合(%)
写本	346	53.6
刊本	298	46.2
不明	1	0.2
合計	645	100.0

第7表 米国議会図書館の写本と刊本の時代別のタイトル数

時代区分	写本	刊本
	奥書等	刊記
中古	6	0
中世	28	0
江戸初期	0	6
江戸前期	21	56
江戸中期	70	50
江戸後期	31	52
江戸末期	10	14
明治	4	1
不明	176	119
合計	346	298

表)。

分類別のタイトル数は、1位の仏教が全体の5割を占め、圧倒的に多いことがわかった(第8表)。仏教のほかには地理が次に続き、米国議会図書館長年次報告に仏教と地理学が特筆すべき資料であるとされていることを裏づける結果となった。しかし、タイトル数としては、地理は仏教に遠く及ばない。米国議会図書館長年次報告によると、朝河がLCのために収集した日本の仏教資料は、①日本独自の仏教の宗派である浄土宗、真宗、日蓮宗に関する資料、②インドや中国に起源を持つ仏教の宗派である天台宗、真言宗、禪宗に関する資料、③仏教の聖典である『三蔵』、重要な著作として書写した『覚禅抄』などである³⁾。地理は、日本史や風俗習慣研究に重要な地理および地方の地誌で、木版印刷本や古地図も含まれるという。目録では、YULで地理に分類された資料が風土記を中心にした地誌であったのに対し、LCで地理に分類された資料に風土記は見当たらない。その代り、挿絵のある名所図会の各種が充実しているなど、YULよりも通俗的な資料を含

第8表 米国議会図書館の分類別のタイトル数

順位	分類	タイトル数	全体に占める割合 (%)
1	仏教	333	51.6
2	地理	55	8.5
3	歴史	49	7.6
4	音楽・演劇	43	6.7
5	武学・武術	33	5.1
6	政治・法制・附故実	27	4.2
7	総記	18	2.8
8	神祇	17	2.6
9	諸芸	16	2.5
10	文学	14	2.2
10	漢籍	14	2.2
12	教育	6	0.9
12	産業	6	0.9
14	理学	5	0.8
14	芸術	5	0.8
16	医学	2	0.3
17	言語	1	0.2
17	準漢籍	1	0.2
19	経済	0	0.0
	合計	645	100.0

んでいると言える。

2. 米国議会図書館の仏教資料

仏教資料は、研究に欠かせない資料、その筋の必読書、初学者向けにわかりやすく解説したものなどに分類できる。資料同士が関連した資料も多く見られた。例えば、『十卷章』は、『秘蔵宝鑰』などを合わせた真言宗の開祖である空海の著作で、真言宗の教義を示した重要典籍であるが、その『秘蔵宝鑰』の主な解釈書である『秘蔵宝鑰纂解』も目録にあり、原典と解説両方が収集されていることがわかる。全体にタイトルの語尾に注、註、解、抄、鈔、略、抜、編、集などが付いた資料が散見され、経典ではなく、各宗派の教祖や優れた僧侶の伝記や教えについて解説した資料を集めていると考えられる。朝河の専門との関わりに目を向けると、朝河の専門は比較法制史であり、そのためにも仏教資料は日本の歴史を語る上で必須の資料である。しかし、自身の所属するYULではなくLCに仏教資料が多いことから、LCに仏教資料が多く集められたことには、朝河なりの考えがあるように思われる。

米国議会図書館長年次報告に朝河の見解が示されている。それによると、朝河は従来のヨーロッパやアメリカの学者にとって、中国や日本の仏教の発展を研究するのに適した資料が不足していたと指摘し、日本仏教について、日本国内にも類を見ないほどの充実したコレクションを収集できたとしている³⁾。つまり、朝河は多くの利用者の利便性を考えて、仏教資料をLCに集めたということが考えられる。これは、米国議会図書館長年次報告でPutnamが朝河の収集を“国立図書館における広範な利用に適したコレクションを収集した”と評価していることから納得できる³⁾。朝河が“仏教の発展の研究に適した資料”と述べている点にも注目したい。LC内の重複資料の仏教書は、解題書誌類にないような珍しいものというよりも、代表的な原典をわかりやすく注解した資料あるいは、要約した資料の中でも第一級のものを集めたのではないだろうか。これらは、仏教の側面から考えると、二次資料にあたるものかもしれないが、仏教の流布という歴史の側面から考えると、むしろ一次資料の要素を備えた研究資料ということができ、朝河の報告内容とも一致するよ

うに思われる。

これらの考えを補強するような朝河の仏教に対する考え方を示す著作がある。比較法制史を専門とした朝河は、フランスの中世史家である Marc Bloch と交友があった。Bloch らが創刊した『社会経済史年報』(*Annales d'histoire économique et sociale*)⁶⁵⁾に、朝河は「日本の社会経済史上における宗教の位置 (*La place de la religion dans l'histoire économique et sociale du Japon*)」というフランス語論文を発表している⁶⁶⁾。原輝史がこの論文を訳出しているが、その中で、朝河は仏教を中心に分析を展開するにあたって、その理由を“仏教は、神道やその他の宗教よりも、日本の社会的発展、精神的かつ文化的進化に決定的な影響を及ぼしたからである”⁶⁷⁾と述べている。

つまり、朝河は、仏教を単に宗教としてとらえるのではなく、日本の社会に根差したもので、人々の生活面や心理面と切り離せないものとしてとらえていることがわかる。その仏教を知るとは、自ずと日本の歴史を知ることにつながると考えていたとみられる。

朝河にとって仏教は、幼少期の天正寺住職栗林圓海との出会いや、神職の家に生まれ、儒学者として過ごし、仏式を以って菩提寺に入り、神儒仏三教を兼ねた安積良斎の生涯を聞いて育ったこと、東京専門学校で「宗教的生命を論じて究竟の疑に及ぶ」という哲学に関する卒業論文を書いていることなどから推測して身近な存在であったと思われる。日本資料収集時には、仏教史学者の村上专精の仏教史の講義を聴いていたなど日本滞在中にこうした専門家の助言を受けることもあったと推測される。朝河の仏教観などが様々の出会いから形成され、それに専門家の助言などが相まって、このような収集ができたと考えられる。

要するに、LC の仏教資料は、教祖や宗派の蓄積を収集しているということであり、日本の歴史を知る上で欠かせない資料であると言える。「日本部門の基盤となるもの」、「一次資料」、「日本の歴史と制度を知る上で最も中心となる資料」、「正式な日本の文献」という米国議会図書館長 Putnam の要望に沿うものであり、且つ日本の研

究に資する資料という点で朝河自身の方針も含んだ収集を実現させたと考えられる。

D. イエール大学図書館と米国議会図書館のコレクションの重複資料の比較

双方の目録から、両方に共通する資料があることがわかった(第9表)。この重複資料は、朝河が両図書館にとって必要と考えてあえて複数を用意した資料ではないかと推測した。本節では、重複した資料を分析し、朝河が何を最重要と考えていたのかを明らかにする。

重複資料 28 タイトル中、16 タイトルが歴史に分類される資料であった。歴史で最も多いのは史料であるが、これらはすべて日記で、中世から近世にかけて幅広く収集している。その時代を代表する日記やその時々で重要な地位にいた人物の日記であり、主に政治、文化、宗教などを知るのに欠かせない史料であると言える。

『群書一覽』については、LC に『群書一覽』があるが、YUL に『続群書一覽』がある。厳密に言うとは重複に数えられないが、解題書誌を収集していることは興味深いため、取り上げた。『群書一覽』は、江戸後期の 1802 年に尾崎雅嘉が国書を分類、解題したもので日本における総合的な国書解題の先駆けと目される。好評を博して増補修正版が数多く出された。その 1 つが西村兼文による『続群書一覽』である。YUL の Orbis で検索すると、YUL にはすでに 1873 年に『群書一覽』が蔵書としてあったことがわかった。朝河は YUL がすでに『群書一覽』を所蔵しているのを認識していたため、その増補訂となる『続群書一覽』を YUL のために集めたのではないかと推測できる。さらに、『群書一覽』が刊本であるのに対し、YUL の『続群書一覽』は刊本ではなく写本である。『続群書一覽』が刊行されるのは、大正に入ってから 1926 年で、朝河が集めた 1907 年時点では刊行されていなかったため、西村が編纂していた『続群書一覽』を書写したと考えられる。以上から、LC には基本となる解題書誌を収集し、YUL には既存の資料を補完するような最新版を収集している様子がうかがえる。つまり、闇雲に収集したわ

第9表 イェール大学図書館と米国議会図書館の両目録の重複資料

1次区分	2次区分	書名	タイトル数
歴史	総記	たいへいねんびょう 泰平年表	16
		めい かねんびょう 名家年表	
		ぶ こうねんびょう 武江年表	
	雑史	ぎよくろそう 玉露叢	
		めいりょうこうはん 明良 洪範	
史料	だんかい 談海		
	ぞくだんかい 統談海		
書誌学	ぶ や しよくだん 武野 燭談	16	
	きんだいこうじつげん びろく 近代公実嚴秘録		
総記	随叢	こ にじょうもろみち き 後二条師通記	3
		い のくまかんぼく き 猪隈関白記	
地理	日本地誌	かんもん につき 看聞日記	2
	外国地誌	まんさいじゅうごう につき 満濟准后日記	
政治・法制・附故実	法令	だいじょういんじしやぞうじ き ぼつすい 大乗院寺社雜事記拔萃	2
		かねみ きょう き 兼見 卿記	
武学・武術	兵法	ぎ えんじゅうごう につき 義演准后日記	2
		ぐんしよいちらん 群書一覽	
音楽・演劇	音楽 絃楽	おちぼしゅう 落穂集	1
		しじくろくみん 舳舻訓	
教育	教訓	みかわのくにふたばのまつ 三河国二葉松	1
		かんかい いぶん 環海異聞	
産業	商業	ぶつ きりょうせんちゅうふんしやく 服忌令撰注分釈	1
		りゅうえい ひ かん 柳 宮秘鑑	
武学・武術	兵法	しゅう ぞうけつ き 主図合結記	2
		ぶ びまつげ 武備目睫	
音楽・演劇	音楽 絃楽	とうどうしゅうようろく 当道拾要録	1
		くんぞく 君則	
産業	商業	おおさかしやうぎやうしゅうかんろく 大坂商業習慣録	1

けではなく、朝河なりに考慮して YUL と LC の現状に即して収集したと言える。

産業のうち商業に分類された『大坂商業習慣録』は、江戸時代の大坂の商い慣習の調査記録である。明治時代の1883年に農商務省三等属の遠藤芳樹によって編纂されたもので、明治政府において商法典の制定に関する議論が起こった際に、

商業の旧慣習を調査したものである。朝河が、官公庁の資料をも書写して集めたということが書簡や両図書館長年次報告に記載されていたが、それを裏づける資料であると言える。

YUL と LC の両方に重複した資料を調査した結果、朝河がどのようなコレクションを構築しようとしたかが見えてきた。両図書館に共通して集

めているのは、日本史の歴史資料である。それも単なる歴史資料ではなく、行事や習慣、文化、風俗、政治などに関わる原典を収集している。著者や内容の対象となった人物は、武家や公家、宗教関係の知識人で、庶民の書いたようなものは集められていない。目は広いが、下世話なものは含まれないと言える。趣味人とは違って特定の作品に固執する様子はみられない。朝河の自分なりの考えや見方、価値観があって集めていると思われ、全体的に朝河の関心が政治史、文化史にあったと思われる。

E. 目録の限界と今後の課題

1. 図書館長年次報告にあって目録にない資料

イエール大学図書館長年次報告では、日本の文明化の歴史を伝える各時代の資料のほかに、日本の最近の事情（明治時代）に関する資料があったことが報告されている。日本の最近の事情に関する資料は、数百冊の現在の日本の教育、法律、外交、経済、地理学・地質学について記された資料と1,733枚の地図から成り、その大部分は、内閣事務局、日本政府の各省庁、大臣や高官からの寄贈である³⁹⁾。しかし、今回の「日本文書コレクション」の目録には、このような最近の事情に関する資料は地図を含め、ほとんど見られない。さらに、イエール大学図書館長年次報告に次のような資料がある。“仏教関係では、『三蔵』の完全翻訳版がある。美術資料もまたよく収集され、専門書や数本の巻物の書画、数百点の美術品の複製、帝国大学の工科大学が特にイエールのために作成した各時代の代表的な日本建築史の技術的な図面50枚などが含まれる”³⁹⁾。しかし、「日本文書コレクション」の目録からは、『三蔵』や美術資料、日本建築史の図面などを見出すことはできない。

米国議会図書館長年次報告によると、刊本は多くの専門書のほかに、歴史や文書の重要な叢書や文学、法学、科学、芸術、産業の新刊書も豊富に含まれていたとあるが、『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』に継続して刊行されるような一連の書物や新刊書はほとんど見られない。日本における仏教の資料の『三蔵』や“極めて重要な日本と

中国の書誌、神道、民間信仰、古代の遺物、礼儀作法、古い日本の歌、刀剣、手芸などもよく収集した”³⁾とされるが、『三蔵』や二次資料は『米国議会図書館蔵日本古典籍目録』に収録されていない。

しかし、目録にはなくとも、書簡や両図書館長年次報告において、朝河は經典を集成した『大蔵経』（図書館長年次報告では『三蔵』とされている）を両図書館のために集めていることが示されている。両図書館のOPACで検索すると、京都の蔵経書院による『大蔵経』の日本校訂と『大日本統蔵経』がそれぞれ検索結果に出てくる。なぜ『大蔵経』が目録にないのか、朝河のコレクションとして扱われているのかどうかはわからないが、書簡や図書館長年次報告から朝河が仏教の教義の典拠となる經典にも注意を向けていた様子がかがえるという点は留意する必要がある。

目録に見られないものとして、二次資料と標準的な資料の欠如が挙げられる。図書館に備えるべき必須アイテムである参考図書などの基本的なレファレンス資料がほとんど見られない。明治24（1891）年編纂の日本初の国語辞典『言海』や、江戸時代の辞書である『節用集』も目録には見られない。朝河の専門の歴史研究の必需品である系図類、『古事記』や『日本書紀』といった「記紀」や、『日本書紀』から始まる「六国史」の類、「四鏡」の歴史物語もない。そのほかに、一般的な文学作品が目録にはなかった。先行研究では、収集資料の1つに「文学」があるということであったが、目録を分析した結果、一般的な文学作品はほとんど見受けられなかった。文学に分類可能な資料の内容を調査したところ、日本史の史料となる文献であることが明らかとなった。このことから、「literature」は「文学」と訳すべきではなく、「文献」ととらえることが適当であると解釈した。以上から、目録にない資料は、主に次のようになる。すなわち、政府からの寄贈資料、叢書や新刊書など最近の事情に関する資料、地図、美術資料、二次資料、『古事記』や「六国史」などの歴史研究に不可欠な史料、一般的な文学作品である。

2. 目録収録範囲の限定と排架方針の変遷にともなうコレクションの移動

図書館長年次報告にあって目録にない資料，加えて，二次資料や歴史研究の標準的な資料，文学作品がなぜ目録に見られないのかということは，それぞれの図書館長年次報告に比べて各目録の収録数が少ないことと密接に関係している。

イエール大学図書館長年次報告に比べて目録の収録数が少ないのは，目録はBRBLの所蔵する「日本文書コレクション」の中の収集資料に限られているためと考えられる。イエール大学では，朝河の亡くなった後の1949年に当時の東アジア関連の教員の意見にしたがって，それまで別置されていた日本を含む東アジアの蔵書が一般書庫に混配され，朝河収集資料もそのときに解体され書架に分散した。1974年に一般書庫の和古書が集められたときに，文書，写本類の大部分が「日本文書コレクション」としてBRBLへ移管されたという経緯がある¹⁾。BRBLはその名のとおりに，貴重書を専門に収蔵するために作られた図書館である。朝河の集めた資料が利用に供するものであったため，コレクションのまとまりを解かれて，一般書架に混配されたものが再度朝河の資料として認識されるようになった際に，一部はそのまま一般書架に紛れたままになった可能性もある。たとえば、『古事類苑』がある。これは，朝河がYULのSchwab館長に送った書簡の入手資料の一覧に見られるが，目録には含まれていない。こうした百科事典の類は，使うための資料で利用も多く，貴重書庫に保管されるとは考えにくい。

米国議会図書館長年次報告にあるような明治の資料が，目録では極端に少ないことの原因として，「日本古典籍」という江戸時代以前の資料として区切られた範囲が目録に収録されており，大部分の明治期の資料は別に管理されているからではないかと考えられる。地図や美術資料は，コレクションとして別扱いになり，ほかの部門で管理されている可能性が考えられる。現にLCでは，地図などがほかのSectionに移管されているということである^{17), 68)}。目録の編纂方針の違いによって，管轄外に朝河の収集した資料が紛れてい

る場合は，目録に収録されなかった可能性が考えられる。

今回の目録の収録範囲が，YULは貴重書を管轄するBRBLにある写本や文書を中心とした日本資料であったこと，LCはAsian DivisionのJapanese Sectionが管理する資料のうち，明治よりも前の写本・刊本を中心とした「日本古典籍」に限定されていたことにより，政府からの寄贈資料，叢書や新刊書など最近の事情に関する資料，地図，美術資料，二次資料といった朝河収集資料が目録から漏れたと考えられる。目録の収録範囲の制約により，一般的な文学作品が目録に収録されていないことも考えられるので，朝河が文学作品を集めていないと一概には言い切れない。したがって，朝河が重要として両図書館に収集したと考えて検討した両図書館に重複する資料は，日本史の原典であったが，重複する資料がほかにも存在する可能性がある。

さらに，歴史研究に不可欠な史料や基本的なレファレンス資料，一般的な文学作品は，すでに所蔵されていた可能性が考えられる⁶⁹⁾。『古事記』や「六国史」などの史料は，それなしに研究が成り立たない資料であるので，収集資料の中になければ，すでに所蔵していたと考えるのが妥当であろう。関心がなかったので集めなかったとは考えにくい。YULの場合は，すでに1855年にAOSコレクションが移管されるなどしており，既存の日本資料にどのようなものがあつたのかを調べる必要がある。

以上を踏まえると，先行研究では，朝河が日本古典籍を中心に選定し，購入したとみられ，一次資料を中心に収集したとされてきたが，目録の収録範囲が限定されていることから考えて，朝河の収集資料が完全に明らかになったとは言えないため，引き続き検討する必要がある。

3. 朝河の目指した「日本コレクション」

今回の目録検討によって，YULもLCも朝河の収集したコレクションの全体の1/5ではあるが，朝河がアメリカの日本図書館に必要なだと考えて収集したコレクションの一端を考察できた。目録の

範囲内で言えることは、YULは、日本の制度の発展に関する一次資料を所蔵することがその特徴として浮かび上がった。朝河の収集方針や朝河の一次資料を重視した研究の姿勢から考えて、これらは、日本を学ぶ学生に研究材料を提供するための資料であると考えられる。LCは、仏教資料が特徴的であったが、朝河がアメリカに日本の仏教の発展を研究するのに適した資料が不足していることを米国議会図書館長年次報告で指摘しており、仏教を単に宗教としてとらえるのではなく、日本の文化や慣習、人々の生活に根差したものととらえて日本に対する理解を深めるものと解釈して収集したと考えられる。YULとLCに重複する資料は、日本を理解するための資料であり、いずれも日本を研究する学生や研究者が原典を用いて研究できるようにしたと考えられる。今回明らかになった1/5の日本古典籍を中心とした資料は、日本を伝える一次資料であり、図書館からの要望と朝河の収集方針に照らしてみても、アメリカにおける日本図書館の幕開けにふさわしい内容であったと言える。

目録に収録のなかった政府からの寄贈資料、叢書や新刊書など最近の事情に関する資料、地図、美術資料、二次資料、歴史研究に不可欠な史料、文学作品などが含まれると考えられる残りの4/5については、今後の検討課題としたい。

V. 朝河貫一の目指したコレクションとその意義

本研究は、アメリカにおける日本コレクションがどのようにして始まったのかを朝河の第1回日本帰国（1906.2-1907.8）における日本資料の収集に焦点をあてて考察してきた。研究によって明らかになったことをここで整理する。

文献調査および現物調査から明らかになった収集の経緯と過程によって、次のことが確かめられた。すなわち、朝河の日本資料の収集は、YULやLCにとつてだけでなく、アメリカにおいて初めての計画的な日本資料の収集であった。アメリカにおける日本資料の収集は、朝河以前には専ら寄贈が主であり、組織立って集められたものはな

かった。

収集の経緯からは、朝河の収集の実現に様々な要因があったことも明らかとなった。

まず、内的要因として、朝河が学生時代からYULで日本資料整理のアルバイトを経験していたことが挙げられる。この経験によって、YULの日本資料の質と量のある程度把握できていたとみられる。朝河は独自に目録の調査を行っており、それに基づく予算の見積りを提示するなど日本での資料の入手を具体的、現実的に考えることができた。朝河自身の先見の明や学識もあり、日本図書館を構想した際に、それを具体化するために要人へ働きかけることができた。収集にかかる熱意と日本に対する知識と行動力を合わせ持った稀有な存在であったと言える。朝河と図書館長らの書簡のやりとりからは、日本図書館の必要性にいち早く着目し、自ら収集を提案した朝河の積極性も確認できた。朝河は始めからYULとLCを前提に日本資料を収集することを想定していたのではなく、アメリカ国内に組織的に収集した資料をもつ日本図書館を設置しようと構想して奔走した結果、それに応えたのがYULとLCであったことがわかった。つまり、朝河の積極的な働きかけなくして、現在のYULとLCの日本コレクションは実現しなかったと言える。

次に、外的要因として、日露戦争の直後で、近代国家としての日本に関心が寄せられた時代背景があった。イエール大学においては、日本科の創設が挙げられる。この日本科を朝河に任せることになったことが、イエール大学が日本資料の収集を依頼するに至る大きな要因であったと考えられる。イエール大学の学長Hadleyがアジアに関心を持っていたことも有利に働いたであろう。LCの場合は、将来のための日本資料の基盤作りを行いたいという米国議会図書館長Putnamの意向があったとみられる。両図書館の要望や朝河の収集方針に基づき、収集が行われ、日本国内での公的機関や民間の出版社、図書館、大学、寺院などの協力を得て収集が実現したが、両図書館長年次報告や書簡のやりとりを考察することによって確認できた。

収集の経緯を明らかにする過程で、現物を閲覧したことによって、写本に2種類あることがわかった。さらに、朝河の書入れのある資料を発見した。朝河の書入れは、収集の経緯が読み取れる貴重な資料であった。先行研究では、朝河の書き入れについて一切触れられていなかったが、これこそ、朝河が集めたことを示す蔵書印や蔵書票などと並んで重要な証拠となるものであり、見逃すことはできない。装丁からは、ほとんどを洋装本にしていることから使うことを前提としており、利用を重視していることがわかった。資料の状態や必要に応じて和装本のままにするなど、資料によっては洋装にしていないことも注目される。資料の価値を尊重し、配慮している様子がうかがえる。つまり、単純に集めたのではなく、自分の目で資料を選定しているということが言える。これらは、貴重書コレクションを作ろうとしたのではないということを裏づけるものである。

目録調査からとらえたコレクションの特徴として、今回の研究では、YULのBRBL所蔵資料を中心とした目録、LCの日本古典籍の目録を用いたため、少なくとも日本古典籍として認識されている部分が明確になった。目録の収録範囲が限定されていたこともあり、朝河の収集した資料の全貌は明らかになったとは言えない。YULもLCも混配や移管によるコレクションの解体と再統合などによるコレクションの変化により、目録と図書館長年次報告の資料の量に差が出た可能性がある。現時点で朝河の収集資料として認識されていない資料が図書館にあると考えられる。

目録調査を踏まえ、両図書館におけるコレクションの意義は次のようにまとめられる。今回の目録の範囲内で、明らかになった朝河の収集資料は、YULでは日本の制度の発展に関する一次資料で、研究材料の提供であり、LCでは教祖や宗派による日本の仏教の一次資料で、日本の歴史を知る上で欠かせない資料であった。YULとLCの目録の重複によって、朝河が歴史資料を中心とした、一次資料の原典を収集していたことが明らかとなった。すなわち、朝河は、日本を研究する学生や研究者が原典を用いて研究できるようにし

たと考えられる。朝河は、図書館の要望に沿いつつ、日本研究や日本を知るための一次資料の収集という姿勢を貫いていると考えられる。これは、朝河の収集方針として示されていた、研究に利用できる第一級資料を収集すること、1つしか存在しないものは日本から持ち出さず、写して収集することという2つの方針に通じるもので一貫していると言える。朝河は、寄贈ではない選択収集によって日本を体現させた最初の人物であり、アメリカに、まさに「日本コレクション」と言うべきものをもたらし、利用できる環境を整えたことが明らかとなった。

謝 辞

本研究は、2012年度三田図書館・情報学会の研究助成を受けて実施しました。本論文は、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻情報資源管理分野に提出した修士論文をもとにしたものです。執筆にあたってご指導いただいた慶應義塾大学文学部の田村俊作教授に深く感謝いたします。さらに、査読者、編集委員の皆様からは、多くの貴重なご意見をいただきました。厚く御礼申し上げます。

注・引用文献

- 1) 金子英生. イェール大学図書館と朝河貫一. 調査研究報告. 1990, no. 11, p. 35-40.
- 2) 阿部善雄. 最後の「日本人」: 朝河貫一の生涯. 岩波書店, 1983, 344p.
- 3) Library of Congress. Report of the Librarian of Congress and Report of the Superintendent of the Library Building and Grounds for the fiscal year ending June 30 1907. G. P. O., 1907, 167p.
- 4) 中村尚美. “朝河貫一略伝”. 朝河貫一書簡集. 朝河貫一書簡編集委員会編. 早稲田大学出版部, 1990, p. 5-16.
- 5) 井出孫六. クリオ(歴史の女神)の使徒 朝河貫一. 国を越えた日本人. 風濤社, 2003, p. 39-79.
- 6) 日本資料を蔵書のまとまりとして特に表現する場合に「日本コレクション」という言葉を用いることとする。
- 7) 日本語で書かれた資料を所蔵し、提供するアメリカの図書館を便宜上「日本図書館」と呼ぶこととする。
- 8) 江上敏哲. 本棚の中のニッポン: 海外の日本図書

- 館と日本研究. 笠岡書院, 2012, 296p.
- 9) 児玉実英. アメリカのジャポニズム: 美術・工芸を超えた日本志向. 中央公論社, 1995, 221p.
 - 10) O'Connor, Thomas F. Collection development in the Yale University Library, 1865-1931. *The Journal of Library History*. 1987, vol. 22 no. 2, p. 164-189.
 - 11) Fukuda, Naomi. Libraries for Japanese studies: a report of a survey. International House of Japan Library, 1963, 14p.
 - 12) Kuroda, Andrew Y. "A history of the Japanese collection in the Library of Congress 1874-1941." 図書館資料論集: 仙田正雄教授古稀記念. 仙田正雄教授古稀記念会編. 仙田正雄教授古稀記念会, 1970, p. 281-327.
 - 13) 和田敦彦. 書物の日米関係: リテラシー史に向けて. 新曜社, 2007, 406p.
 - 14) Hammond, Ellen H. "A history of the East Asia Library at Yale University." *Collecting Asia: East Asian Libraries in North America, 1868-2008*. Zhou, Peter X. Association for Asian Studies, 2010, p. 3-20.
 - 15) 小泉徹. 日本語資料図書館員としての朝河貫一. 図書館雑誌. 2009, vol. 103, no. 1, p. 44-45.
 - 16) 国文学研究資料館文献資料部. イェール大学蔵・日本文書コレクション目録. 調査研究報告. 1990, no. 11, p. 31-93.
 - 17) 米国議会図書館蔵日本古典籍目録刊行会編. 米国議会図書館蔵日本古典籍目録. 八木書店, 2003, 562p.
 - 18) 小峯和明. ワシントン議会図書館の和古書資料. *日本歴史*. 2000, no. 620, p. 57-59.
 - 19) 小峯和明. 議会図書館及びイエール大学所蔵朝川収集本をめぐって. *Early Modern Japan: An Interdisciplinary Journal*. 2004, vol. 12, no. 1, p. 14-16.
 - 20) 山内晴子. 朝河貫一論: その学問形成と実践. 早稲田大学出版部, 2010, 640p.
 - 21) 矢吹晋. 朝河貫一とその時代. 花伝社, 2007, 295p.
 - 22) この言葉は, 2007年にイエール大学が朝河の大学就任100周年を記念して Saybrook College の中庭に作った朝河貫一記念ガーデン (the Asakawa Garden) の記念碑に刻まれている。朝河は, 1934年から定年までその College で生活していた。
 - 23) 金子英生. "朝河貫一と図書館の絆". 朝河貫一の世界: 不滅の歴史家偉大なるパイオニア. 朝河貫一研究会編. 早稲田大学出版部, 1993, p. 225-235.
 - 24) 朝河の図書館関係活動はイエール大学の東アジア図書館部長の枠を超えている。たとえば, 第1回日本帰国の際に日本文庫協会 (現在の日本図書館協会) とアメリカ図書館協会 (American Library Association: ALA) を仲介して日米の図書館界の相互連絡の道を開いたこと, 図書館の入った東京のアメリカン・センター設立計画, 第2回日本帰国での呼びかけをきっかけとした日本イエール協会コレクション, 関東大震災におけるアメリカ国内での資料支援など日米の懸け橋としての活動が目につく。
 - 25) オーシロ・ジョージ. "日本史学のパイオニア, 朝河貫一の海外留学". 朝河貫一の世界: 不滅の歴史家偉大なるパイオニア. 朝河貫一研究会編. 早稲田大学出版部, 1993, p. 41-53.
 - 26) Kan'ich Asakawa, Letter to Addison Van Name, September 14, 1903. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
 - 27) 在外日本古典籍研究会. "イエール大学図書館東アジア図書館". 在外日本古典籍研究会. <http://www.jlgweb.org.uk/ojamasg/details/yale2.html>, (参照 2012-12-20).
 - 28) Chair, Vickie Fu Doll; Hsu, Calvin; Liu, Wen-Ling. "Council on East Asia Libraries Statistics 2010-2011: for North American Institutions". CEAL Statistics Committee, 2010-2011. <http://www.lib.ku.edu/ceal/php> *Journal of East Asian Libraries*, no. 154, 2012, p. 53-69. (accessed 2012-12-05).
 - 29) Yale University Library. "EAL Collections—About the East Asia Library—Yale University Library Subject Guides at Yale". Yale University Library. <http://guides.library.yale.edu/content.php?pid=495030&sid=4067530>, (accessed 2014-03-27).
 - 30) Lee, Hwa-Wei. "A history of the East Asian collections in the Library of Congress: a bibliographic guide". *Collecting Asia: East Asian Libraries in North America, 1868-2008*. Zhou, Peter X. Association for Asian Studies, 2010, p. 23-31.
 - 31) Library of Congress. "Asian Reading Room". the Library of Congress. <http://www.loc.gov/rr/asian/>, (accessed 2013-01-04).
 - 32) 鈴木平八郎. アメリカ議会図書館: その National Library としての歩み. 図書館研究シリーズ. 1967, no. 11, p. 1-87.
 - 33) Library of Congress Asian Division. *Library of Congress Asian collections: an illustrated guide*. Library of Congress, 2000, 80p.
 - 34) Cole, John Y.; Aikin, Jane editors. *Encyclopedia of the Library of Congress: for Congress, the Nation & the World*. Library of Congress, 2004, 569p.

- 35) 藤野幸雄. アメリカ議会図書館: 世界最大の情報センター. 中公新書, 1998, 189p.
- 36) 朝河貫一書簡編集委員会編. 朝河貫一書簡集. 早稲田大学出版部, 1990, 866p.
- 37) 福島県立図書館編. 福島県立図書館所蔵朝河貫一資料目録. 福島県立図書館, 1992, 57p.
- 38) Herbert Putnam, Letter of credit, January 18, 1906. Letter of credit given to Dr. Kan'ichi Asakawa on the development of Japanese collection, 国立国会図書館.
- 39) Yale University Library. Bulletin of Yale University: Report of the Librarian., Yale University, 1907-1908, 43p.
- 40) Kan'ich Asakawa, Letter to Daniel Coit Gilman, October 24, 1905. Kan'ichi Asakawa papers (MS40), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 41) Daniel Coit Gilman, Letter to Kan'ich Asakawa, October 31, 1905. Kan'ichi Asakawa papers (MS40), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 42) Kan'ich Asakawa, Letter to Franz Boas, November 17, 1905. Kan'ichi Asakawa papers (MS40), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 43) Friedrich Hirth, Letter to Kan'ich Asakawa, January 9, 1906. Kan'ichi Asakawa papers (MS40), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 44) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, January 5, 1906. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 45) Arthur Twining Hadley, Office appointment books, Arthur Twining Hadley, president of Yale University, records (RU25), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 46) Arthur Twining Hadley, Letter of introduction, January 19, 1906. 受信書簡 (E145-1), 朝河貫一資料, 福島県立図書館.
- 47) John Christopher Schwab, Letter of commission, January 19, 1906. 受信書簡 (E369-1), 朝河貫一資料, 福島県立図書館.
- 48) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, March 14, 1906. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 49) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, March 19, 1906. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 50) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, January 4, 1907. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 51) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, May 13, 1907. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 52) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, June 16, 1906. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 53) 史料編纂掛の「職員録」1906年度の写字生に本田善平(朝河家史料謄写)とある。この朝河家とは朝河貫一を指すと思われる、少なくとも写字生一人は史料編纂掛にいたことが確認できた。しかし、残りの19人については不明である。詳しくは、東京大学史料編纂所編. 東京大学史料編纂所史料集. 東京大学史料編纂所, 2001, 879p.を参照。
- 54) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, November 8, 1906. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 55) Kan'ich Asakawa, Letter to John Christopher Schwab, August 6, 1907. Librarian, Yale University records (RU120), Manuscripts and Archives, Yale University Library.
- 56) 文中の、遠藤芳樹氏とは、IV章の目録分析でYULとLCの重複資料である『大坂商業習慣録』に登場する、農商務省三等属の遠藤芳樹のことであろうと思われる。
- 57) 国文学研究資料館. “日本古典籍総合目録データベース.” 国文学研究資料館. <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>. (参照 2012-12-25).
- 58) 堀川貴司. 書誌学入門. 勉誠出版. 2010, 263 p.
- 59) 杉浦克己. 文献学. 放送大学教育振興会, 2008, 295 p.
- 60) イェール大学の図書館長年次報告や先行研究では、3,578冊(8,120タイトル)8,120 works in 3,578 rebound volumesとされ、先行研究でも踏襲されてきた。しかし、Andrew Y. KurodaがLCの収集資料について、米国議会図書館長年次報告のworks(タイトル数)がvolumes(冊数)であると指摘しており、量的にみてもKurodaの見解はつじつまが合う。このことから、YULもタイトル数が冊数を上回るの是不自然であり、タイトル数と冊数が逆になっていると考えるのが妥当と判断し、本論文では冊数とタイトル数を改めたことを指摘しておく。
- 61) 吉田精一. 随筆とは何か: 鑑賞と作法. 創拓社, 1990, 300p.
- 62) 増井由紀美. 朝河貫一の日記に表われた国際化時代の日本: 1917-1919年. 敬愛大学国際研究.

- 2006, no. 17, p. 69-103.
- 63) 増井由紀美. “朝河貫一の講義”. 甦る朝河貫一: 不滅の歴史家偉大なるパイオニア. 朝河貫一研究会編. 国際文献印刷社, 1998, p. 15-27.
- 64) Kuroda は, 米国議会図書館長年次報告で 9,072 works (タイトル) とされているのが 9,072 volumes (冊) の誤りであるとしており, 本論文も冊数とタイトル数を Kuroda の判断にしたがった。
- 65) 『社会経済史年報』は, 名前を変えて現在も刊行の続くフランスの歴史学雑誌で, アナール学派の活動の中心であり, 同学派の呼称もこの雑誌名に由来する。
- 66) Asakawa, K. La place de la religion dans l'histoire économique et sociale du Japon. *Annales d'histoire économique et sociale*. 1933, vol. 5, p. 125-140.
- 67) 原輝史. 朝河貫一「日本の社会経済史上における宗教の位置」(『社会経済史年報』1931年, バリ)をめぐって. 早稲田商学. 1993, no. 357, p. 157-179.
- 68) 渡辺憲司. 米国議会図書館日本古典籍目録刊行までの状況と集書傾向の大略. *Early Modern Japan: An Interdisciplinary Journal*. 2004, vol. 12, no. 1, p. 17-19.
- 69) 朝河が博士論文を改題して1903年に出版した *The early institutional life in Japan: a study in the Reform of 645 A. D.* (大化改新の研究)の注には, 『国史大系』とそこに集成されている『古事記』, 『日本紀』, 『類聚三代格』など, 『大日本古文書』などが確認できる。これらの根本的な史料はおそらく YUL ですでに所蔵していたと考えられ, あえて集める必要がなかったのかもしれない。

要 旨

【目的】 本研究の目的は, 朝河貫一(1873-1948)が第1回日本帰国の際に行ったイエール大学図書館と米国議会図書館のための日本資料の収集(1906-1907)の経緯と過程, 資料の特徴, およびその意義を明らかにすることである。

【方法】 まず, 先行研究や朝河の書簡, イエール大学図書館と米国議会図書館の各図書館長の年次報告から, 朝河の日本資料収集に至る経緯, 収集の過程を明らかにした。次いで, 双方の図書館でコレクションの現物を実際に閲覧し, 目録ではわからない装丁の特徴や朝河の特別に写させた写本を調査した。さらに, 近年作成された両図書館の日本コレクションの目録を用いて, それぞれのコレクションの特徴を明らかにし, 比較した。

【結果】 アメリカにおける日本資料の収集は, 朝河以前は専ら寄贈で行われており, 朝河の積極的な提案によって, 初めて組織立った日本資料の収集が実現したことが明らかとなった。現物調査では, 装丁の工夫に, 利用と資料の特質を尊重した朝河なりの配慮が見られることがわかった。目録調査により, イエール大学図書館のコレクションの分類別タイトル数は歴史と政治・法制・附故実が全体の6割強を占め, ほとんどが日本の制度の発展に関する一次資料であることがわかった。また, 米国議会図書館の分類別タイトル数は仏教が全体の5割を占め, 朝河が仏教を単に宗教としてとらえるのではなく, 日本を知る上で重要な資料と位置づけていたことがわかった。両図書館に共通して所蔵されている資料も, 日本研究に資すると思われる一次資料の原典であった。イエール大学図書館と米国議会図書館のコレクションは, 両図書館の委託内容や朝河の収集方針を反映しているだけでなく, 対をなして一次資料の原典を提供する一大コレクションであることが明らかとなった。

付録 朝河貫一年譜

年次	年齢	朝河貫一の生涯	日米の主な出来事	日米の図書館界と イエール大学および 米国議会図書館の主な動き	
1873	明治 6	0	12月20日 福島県安達郡二本松町（現二本松市）で朝河正澄、ウタ夫妻の長男として生まれる	〔岩倉使節団帰国〕	
1874	明治 7	1	父正澄が伊達郡立子山村立小学校（同村天正寺に仮設）の教員となり、一家で天正寺に移り住む		
1876	明治 9	3	1月 母ウタが死去	〔日朝修好条規〕	ALA（アメリカ図書館協会）結成
1879	明治 12	6	5月 立子山小学校初等科に入学	〔琉球処分〕	
1886	明治 19	13	川俣高等小学校に転校		
1887	明治 20	14	4月 福島県尋常中学校（現県立安積高等学校）に入学		Yale College から Yale University に名称変更
1889	明治 22	16	中学校が安積郡に移転、神宮禰宜宅に下宿	〔大日本帝国憲法制定〕	
1890	明治 23	17	英語教師 Halifax の教えを受ける		
1892	明治 25	19	3月 尋常中学校卒業 5-8月 郡山町の金透小学校で嘱託英語教師を勤める 11月 英語教師 Halifax 留任願いの建白書を福島県議会に提出 12月 東京専門学校（現早稲田大学）に入学		〔3月 日本文庫協会設立〕
1893	明治 26	20	6月 本郷教会で横井時雄により洗礼を受け、キリスト教徒となる		
1895	明治 28	22	7月 東京専門学校を卒業 12月 アメリカ留学のため、横浜港を出航	〔4月 下関条約調印〕	
1896	明治 29	23	1月 ダートマス大学に編入学		
1899	明治 32	26	5月 ダートマス大学卒業 9月 イェール大学大学院歴史学科に進学	中国の門戸開放宣言	LC 第8代館長 Herbert Putnam 任命 Arthur Twining Hadley イエールの学長に任命
1900	明治 33	27	イエール大学図書館の日本資料整理のアルバイト開始		
1902	明治 35	29	6月 「645年の改革（大化改新）の研究」で博士号を受ける 9月-1906年1月まで、ダートマス大学講師（lecturer）となり東西交渉史などを講義	〔1月 日英同盟調印〕	
1903	明治 36	30	7月 継母エヒが死去		
1904	明治 37	31	11月 『日露衝突』（英文）を英米において刊行 戦争中、30数回にわたり日本弁護の講演を行う	〔2月 日露戦争勃発〕	
1905	明治 38	32	8月 市民オブザーバーとしてボーツマスに滞在し、賠償放棄論を説く 10月 ニューヘイヴン市の Miriam J. Cameron Dingwall と結婚 AOS 会長 Daniel Coit Gilman とコロンビア大学 Franz Boas 教授にアメリカ国内に日本図書館の設置を提案した書簡を送る 12月 父にアメリカで学究生活を続行する意志を伝える	〔8月 ボーツマス講和会議〕	Noyes 浮世絵 300点などを LC に寄贈 YUL 館長 John Christopher Schwab 任命

朝河貫一によるイエール大学図書館および米国議会図書館のための日本資料の収集

付録 続き

年次	年齢	朝河貫一の生涯	日米の主な出来事	日米の図書館界と イエール大学および 米国議会図書館の主な動き
1906	明治 39	33 1月 イエール大学図書館長 John Christopher Schwab に日本資料収集を提案した書簡を送る 1月 イエール大学および、米国議会図書館より日本における日本資料の収集を委託される 2月 シアトル港で乗船し、横浜港に到着（第1回日本帰国） 9月 父正澄が死去 日本の学界との交流と日本資料の収集に専念	4月 サンフランシスコ大地震	
1907	明治 40	34 6月 日本文庫協会の夏期例会で日本資料収集について講演 日本文庫協会の在外会員となる 8月 アメリカに戻る 9月 イエール大学講師（instructor）となり日本文化史（history of Japanese civilization）を担当 10月 ALA に日本文庫協会を紹介、そのほか日本とアメリカの図書館界を仲介する 11月 イエール大学図書館東アジア部長を兼務、その後 40 年間その任にある	〔日露協約〕	〔10月 『図書館雑誌』創刊〕
1909	明治 42	36 6月 実業之日本社から『 <u>日本之禍機</u> 』（日本語で書いた唯一の本）を出版		
1910	明治 43	37 5月 イエール大学大学院の日本文化史助教授（assistant professor of history）に昇進	〔8月 韓国併合〕	
1911	明治 44	38 5月 腸チフスにかかるが、重体を脱する	日米通商航海条約改正調印	
1913	大正 2	40 2月 妻 Miriam が死去		
1915	大正 4	42 5月 大隈首相に「覇権なきアジア外交」を進言 6月-9月 伊仏英三国へ調査旅行	〔1月 対華21カ条要求〕	Walter T. Swingle, LC のために日本で図書購入（18-19 年にも）
1917	大正 6	44 6月 バンクーバーを發ち、7月に横浜港に着く（第2回日本帰国） 東京帝国大学資料編纂掛に在籍して封建社会の史料収集 12月 イエール大学学長より留学期間の一年延長を許可される	第一次世界大戦に参戦	
1918	大正 7	45 7月 奈良・京都など関西方面の調査のため東京を發つ 日本イエール協会で東洋博物館構想を提案	ウィルソンの 14カ条	
1919	大正 8	46 1月 半年間の調査を終え帰京 5月 九州の調査旅行に出発し、四国・中国を経て九州に入る 6月 鹿児島県薩摩郡入来村（現・薩摩川内市入来町）に滞在 7月 帰京 9月 アメリカへ戻る（横浜港で乗船し、シアトル港へ） この後再び日本に帰ることはなかった	パリ講和会議 ヴェルサイユ条約	
1921	大正 10	48 イエール大学財政難により坪内に早大に転職打診	ワシントン会議（日英同盟廃止）	

付録 続き

年次	年齢	朝河貫一の生涯	日米の主な出来事	日米の図書館界と イエール大学および 米国議会図書館の主な動き
1923	大正 12	50 9月 関東大震災につき駐米日本大使に東大およびその図書館の被災状況の詳細を求める やがて東大図書館長より詳細があると、10月、11月の間米国議会図書館長そのほかに対し、図書などの寄贈方について努力する 9月 <u>仏・独・伊・日</u> にわたる比較法制史の講義を担当	(9月 関東大震災)	
1924	大正 13	51 7-9月 イタリアへ調査旅行	排日移民法	
1926	大正 15	53 9月 <u>独伊中世史</u> の講義をも担当		
1927	昭和 2	54 7月 <u>歴史学助教</u> に任命される		
1929	昭和 4	56 5月 『 <u>入来文書</u> 』が完成 (55) イェール大学とオックスフォード大学より発行 11年間にわたる Marc Broch との交友が始まる	世界恐慌開始	
1930	昭和 5	57 7月 <u>歴史学准教授 (associate professor)</u> に昇進		坂西志保, LC に就職
1931	昭和 6	58 ダートマス大学名誉文学博士号	(9月 満州事変勃発)	
1933	昭和 8	60 7月 <u>歴史学研究員 (正教授待遇) (research associate with professorial rank)</u> に昇進	(国際連盟脱退通告) ニューデール開始	イエール大学, 日本からの図書寄贈を受ける -1934
1934	昭和 9	61 セイブルック・カレッジ準フェローとなり、そこに移り住む 夏、日本イェール協会寄贈の「日本イェール協会コレクション」日本古文化資料がイエール大学に到着 12月 <u>大学図書館 333 号室</u> に陳列、公開		日本イェール協会コレクションがイエール大学に到着 -1935
1937	昭和 12	64 7月 <u>歴史学教授 (full professor)</u> に昇進 日本人として初めてアメリカの正教授となる	(日中戦争開始)	坂西志保, LC の図書収集のため日本へ
1938	昭和 13	65 10月 <u>Charles Seymour</u> 学長に東アジア・コレクション後継者として <u>弥永千利</u> を推薦する		LC の東洋部門に Japanese Section 設置
1939	昭和 14	66 10月 ヒトラーの自殺を友人宛の書簡で予言	9月 ナチスドイツがポーランド侵攻	
1941	昭和 16	68 11月 昭和天皇への Franklin Delano Roosevelt 大統領の親書の原案を書き終え、発案者の旧友 Langdon Warner に送る 12月 イェール大学総長が日米交戦中の朝河の自由と生活の庇護を約束する FBI も彼の自由について同様の方針をとる	12月 太平洋戦争勃発	
1942	昭和 17	69 6月 定年を迎え <u>名誉教授 (Professor Emeritus)</u> に推される 大学院棟の9階に移り住む <u>蔵書 5,000 冊</u> を図書館に寄贈	日系人の強制移転	坂西志保, 日本へ送還
1948	昭和 23	74 8月 11日 バーモント州の避暑地で心臓麻痺のため死去		(国立国会図書館設立) ファーマントン・プラン開始

出典: 阿部善雄. 最後の「日本人」: 朝河貫一の生涯. 岩波書店, 1983. 344 p. に付された年譜を参考に作成。年齢の項と世界情勢を加えた。

- 太字は主な図書館関係活動
- [] は日本の動き
- 斜体は朝河の著書
- 下線は朝河のキャリア